

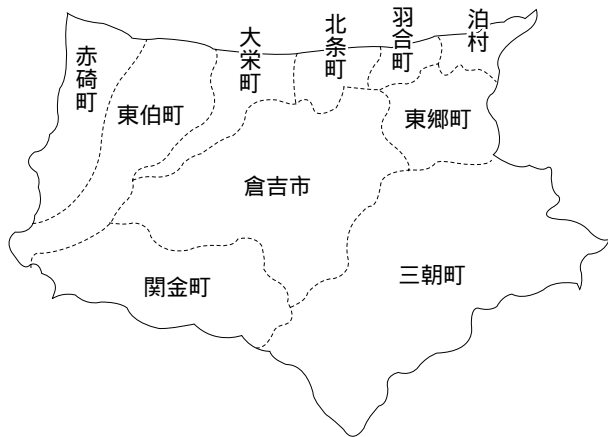
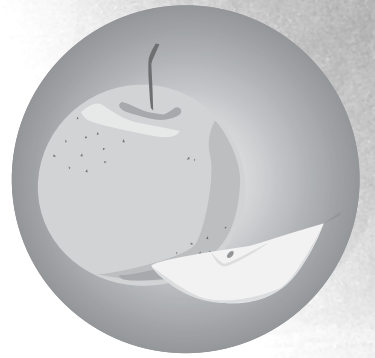
中部



法華寺畑遺跡（倉吉市）



東郷池（東郷町・羽合町）



東伯町	三朝町	倉吉市
赤碓町	関金町	羽合町
	北条町	泊村
	大栄町	東郷町

天神川

中国山地の三国山、津黒山、烏ヶ山に源を発する竹田川と小鴨川の二つの支流をあわせて日本海へと注ぐ一級河川。県中央部を流れ、県内三大河川の一つである。本流の流長（竹田川を含む）は三四キロ、指定延長三一・七キロ、流域面積は五〇〇・五平方キロメートルである。

天神川上流域の竹田川、三徳川は川底を深くえぐり、小鴨川上流部では大南山東部の火山裾野を開析して急崖の浸食谷を形成している。中流部には開けた谷底平野が見られ、小鴨川中下流部には大火山噴出物が広く分布し、天神野台地や久米ヶ原台地を形成している。小鴨川と竹田川の合流地点には、倉吉の市街地が発達する。

かつて天神川下流付近で氾濫や乱流が繰り返されていた。そこで、流路を一定させるため河川改修が行われ、橋津より西側の東伯郡北条町江北にあった天神の森を開削し、現在の河口が作られ、下流部の河道が一定した。河口西側には東西二二キロ、南北一・八キロの北条砂丘が広がる。

倉吉市

打吹公園

倉吉市仲ノ町
JR倉吉駅よりバス十一分、市役所・打吹公園前下車、徒歩五分

倉吉市の旧市街地の南にそびえる打吹山（標高二〇四メートル）は、江戸時代の初めまで城郭が築かれ、その秀麗な姿とあいまって、地域のシンボルとして親しまれてきた。

明治三十七年（一九〇四）、当時の皇太子（後の大正天皇）の山陰行幸を迎える場所として公園が整備された。以後も整備が進められ、現在、城跡を含めて四五ヘクタールに及ぶ総合公園となっている。

打吹山一帯は、山麓の庭園や施設を除くとスタジイやシラカシなど常緑広葉樹が優勢な森林で覆われている。城跡を中心に林を開き、うっそうとした老樹の間を廻遊するように遊歩道が整備され、「森林浴の森一〇〇選」にも指定された名園である。ソメイヨシノを中心にサクラ四千本、ヒラド、クルメ、キリシマなどツツジ四万本が植えられていて、山陰を代表する花木庭園であり、「日本の都市公園一〇〇選」「さくら名

所一〇〇選」にも選ばれている。園内には回遊庭園の他、動物が飼育され家族連れも多く訪れる。四月から五月にかけては「倉吉春まつり」が開催される。

なお、倉吉博物館前から約三〇分で登ることができる打吹山頂上からは、眼下に倉吉平野、天神川、日本海を一望におさめることができる。近くには馬の絵馬で知られる長谷寺及び光格天皇の生母大江磐代君を祭る大江神社がある。



史跡 打吹城跡

倉吉市仲ノ町
JR倉吉駅よりバス十五分
市役所・打吹公園入口下車、徒歩四〇分

標高二〇四メートルの打吹山の山

頂を中心として築かれた城。『伯耆民談記』は山名時氏の嫡子佐衛門佐師義が当城を築いたと伝えている。

『陰徳太平記』には宇津吹城、宇津草城とも記されている。『伯耆民談記』によると、城の正面を北にして天守台のある本丸のほか、南条備前守が居住していたという備前丸とよばれる「二の丸」、山田越中が居住していた「越中丸」（三の丸）、小鴨元清が居住していたという小鴨丸、山麓に「南条屋敷」があった。

現在、打吹山に残る城跡の遺構は、山頂部の曲輪部、西側に派生する尾根上に展開する曲輪群、北側の山麓部に分かれる。

しかし、配置からこれらの曲輪が造られた時期はそれぞれ異なり、室町時代には山頂部周辺、戦国期に西側の曲輪群、近世に主部と北側山麓部分が整えられたと考えられる。南条氏や近世初頭の中村氏によって整備されたものと思われる。

「倉吉」については、「寛書草刈将監」に草刈景継が倉吉城を攻めたと記されている。また吉川元春の書状には、毛利方の部将・益田元祥に「久米郡内倉吉五〇〇石」の地を約束している。

吉川氏奉行人・山原春次らは、益田氏家臣・小原豊前守に倉吉に所領を給付することに決めたが、代わりに「守護分」を与えている。近世の倉吉は三六三石余だったことから、益田氏に給付された倉吉は、打吹山麓の城郭と倉吉町、さらに「守護分」のような周辺の郷村を含む広域の地域であろう。

伝説

昔、むかし、山のふもとに舞い降りた天女が水を浴びていた。その姿を農夫が見つけ、羽衣を隠されてしまった。天女は天へ帰ることができず、農夫と結婚し二人の子供をもつけた。

ある日、天女は羽衣を見つけた子どもたちを残したまま、天に帰っていった。子どもたちは寂しがり、母を呼ぼうと山に登って太鼓を叩き、笛を吹いたという。「打吹山」という名前はこの伝説に由来する。

倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館

倉吉市ノ町
JR倉吉駅よりバス十五分、市役所打吹公園入口下車、徒歩五分

倉吉博物館は、桜の名所としても知られる打吹山のふもとにある打吹公園の一角に、倉吉市の市制二十周年を記念して、昭和四十九年（一九七四）五月に開館した。

館内は、美術部門と歴史部門に分かれ、前田寛治や菅橋彦をはじめとする郷土ゆかりの洋画家、日本画家の作品や倉吉市周辺の遺跡から出土した考古資料、国の重要文化財をはじめ、旧石器時代から江戸時代までの出土品などが展示されている。

重要文化財のうち二件は古墳時代の装飾須恵器である。野口一号墳（倉吉市志津）の装飾子持壺付装飾器台には、狩り・相撲・弾琴の様子を示す物語性に富んだ装飾がある。

また、上野遺跡（倉吉市三江）出土品は、装飾須恵器の終末形態を示し形式化が著しい。どちらも葬送儀礼の変遷過程を示す貴重な遺物である。古墳時代の土製祭祀遺物である谷畑遺跡（倉吉市上神）出土品は、種類の豊富さと量の多さに特徴がある。

県指定文化財のうち二件は弥生時代の遺物、他の二件は埴輪である。

そのなかの小田銅鐸二口（倉吉市小田）は、弥生時代の農耕祭祀に用いられる祭祀具で、複数埋納された例としては県内唯一の出土例である。史跡阿弥大寺墳丘墓群（倉吉市下福田）出土品は、弥生時代の山陰地方特有の墳墓である四隅突出型墳丘墓の供献土器群である。埴輪は、甲と鎧を着け顔に入れ墨をした武人埴輪（倉吉市小鴨より出土）と小首を傾けた愛らしい表情の鹿埴輪（倉吉市向山より出土）である。

その他にも、奈良時代の遺物である伯耆国分寺跡・国庁跡の出土品や大御堂廃寺跡の銅製匙・獸頭などをはじめ、平安時代の瓦経塚としては日本最古の紀年銘をもつ大日寺瓦経などが常設展示してある。

昭和五十七年（一九八二）十月には、倉吉歴史民俗資料館が博物館に隣接して設置された。明治から大正時代の民俗資料が中心に展示され、当時の暮らしや産業について紹介している。

この地方で古くから盛んであった倉吉餅や鋳物業について知ることができる。

開館時間 午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）

休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始
問合せ先 ☎ 0858・22・4409



賀茂神社

倉吉市葵町
JR倉吉駅よりバス十五分、倉吉市役所打吹公園入口下車、徒歩一〇分

賀茂神社は、別雷神を祭神とする。当社の縁起などによると、明応年中（一四九二～一五〇一）に、京都上賀茂社から分霊を勧請したと記される。

かつては、賀茂皇太神宮とか賀茂大明神とかいわれ、寛政年代（一七八九～一八〇一）までは倉吉町の総氏神であったが、その後、町の東半分の総氏神となった。寛政七年（一七九五）の『神社改帳』から、四月酉日と九月十一日に御幸が行われた

ことがわかる。維新後、現社名に改称された。

当社には、鶏卵状の「星石」（天拝石とも）と呼ばれる隕石が保存されているといわれる。

また、当地で語り継がれている「羽衣伝説」では、天女が鳥居の近くにある井戸の傍に生えた夕顔をつたって天に昇ったといわれ、その井戸は「夕顔の井戸」と呼ばれる。

長谷寺

倉吉市仲ノ町
J R倉吉駅よりバス二〇分 長谷寺
西口下車、徒歩十五分

奈良時代創建の古刹で、倉吉市打吹山にある。東西に二つの遊歩道があり、自然探勝するにふさわしい。

法道上人が開いたといわれるが明らかでない。本尊の薬師如来は、室町時代前後のものである。ここには昭和三十二年（一九五七）二月に県の保護文化財に指定された奉納絵馬が多く所蔵されており有名である。巨勢金岡こせのかねおかが描いたといわれる「天文十八年白馬之図」は、夜な夜な絵から抜け出し、暴れ回ったという伝説があるほど勇ましい。この絵馬をはじめ、古くは天文五年（一五三六）そして天和・延宝・貞享・元禄・安永・天保・嘉永とそれぞれの時代に

描かれた立派なものが多い。延宝五年に倉吉の有力な商人赤崎屋次郎右衛門が奉納した、浮世絵風の歌舞伎踊りの図は美術的にも優れている。鐘楼には南洋から持ち帰った鐘と、明徳の年号のある鐘がかかっている。この鐘は『伯耆民談記』によると作州・長田八幡宮にあった梵鐘という。

サクラの頃は特に参拝者や観光客が多い。ふもとには池田恒興（勝入齋）を弔うために建てられた勝入寺がある。



大江神社

倉吉市妻町
J R倉吉駅よりバス十五分 倉吉市
役所前下車、徒歩一〇分

明治十三年（一八八〇）十二月、

倉吉市および付近の人々が大江磐代君おおいわしろの霊を祀ることを願い、許可を得て社号を磐倉神社と称えた。これを聞いた閑院宮載仁親王から神鏡を賜ったので、これを御神体として、賀茂神社に合祀した。

明治四十四年（一九一）十月に倉吉市（当時は町）民により神社が新築され、更に社号を大江神社と改称し、打吹公園うづかきの西南に社殿を建設し、神鏡などを移した。

なお、大江磐代君は光格天皇の御生母である。父は倉吉の出身で岩室宗賢といい、母はりんといった。

磐代君の幼名はつるで、延享元年（一七四四）に、倉吉市湊町みなとに生まれ、九才のときに父に連れられて京都にのぼった。禁裏使番の生駒守意は彼女を可愛がり、妻の寿仙は文芸や婦道を教え、後に成子内親王に仕えた。

磐代君は、天資聡明で徳操高く、筆跡にも優れ、また歌道にも通じていた。成子内親王が閑院宮典仁親王に嫁ぐときには侍妃となり、同家に入った。その後典仁親王の女房となり明和八年（一七七）祐宮兼仁親王を出産したが、これが名高い光格天皇である。安永元年（一七七）

には第二皇子寛宮盈人親王を、ついで有栖川宮家を継いだ織仁親王を出産し安永六年「磐代」と呼ばれるようになった。

寛政六年（一七九四）、典仁親王が亡くなると、直ちに薙髪し法号を蓮上院樂邦定生禅尼とした。文化九年（一八一）十二月九日、逝去した。六十九才であった。

倉吉白壁土蔵群・赤瓦

倉吉市西仲町、東仲町、魚町
J R倉吉駅よりバス十五分、明治町下車、徒歩三分

江戸時代、倉吉には陣屋が置かれ、地域の経済・産業の中心として発展した。打吹山と小鴨川に挟まれた倉吉の古い町並みは、陣屋寄りの町筋が商人町となり、玉川を挟んで反対側の一筋が職人町を中心とした町となった。

西仲町から魚町にかけての玉川沿いの土蔵群で町並みの保存活用が進み、平成十年四月には、まちの活性化を願う人たちによってこれらの土蔵や古い建物を活用した「赤瓦」が誕生した。かつて造り酒屋や醤油屋として使用されていた白壁の土蔵や建物、物産館、喫茶店、ギャラリーなどさまざまなかたちで利用され、新たな魅力を発信している。現在、

赤瓦一号館から八号館まであり、観光客に好評である。

堺町一丁目、魚町、東仲町、研屋町、新町一丁目は平成十年（一九九八）に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、町並み保存が進展している。しかし、西仲町を中心とした西半分は未選定のままである。この西仲町にある江戸時代から続く高田酒造は平成十二年（二〇〇一）、国の有形文化財に登録され、また、よい香りをかもしていることから同年環境省の「かおり風景一〇〇選」に認定された。重要な建物が並んでいるだけに、追加選定が待たれるところである。

開館時間 午前九時～午後六時
店によって異なります。

休館日 無休

問合せ先 ☎ 0858・23・6666

倉吉大店会

倉吉市魚町
JR倉吉駅よりバス十五分
明
治町下車、徒歩五分

倉吉市街の中心部、魚町の東端、津山往来と倉吉往来の分岐点に土蔵造二階建の建物がある。これは、旧国立第三銀行倉吉支店として明治四十一年（一九〇八）八月に建てられたものである。

敷地はほぼ方形であるが東面と北面が通りに面する角地であるため、入口は角地に合わせて四十五度に振りポーチが付き出ている。外壁は白漆喰塗、腰は石張である。和風をモチーフとする外観に対して、内部は洋風意匠である。玄関から中に入ると、客だまりと営業室を分ける櫺のカウンターには渦巻きの付いた持送り付き、壁・天井は白漆喰。吹き抜けで天井が高く、中央のランプ吊り元の浮き彫り（中心飾り）は二重の円で縁どられ目を引く。二か所に設けられた階段も当初のものである。二階にはギャラリーや応接室がある。中心飾りの浮き彫りは二階応接室では葡萄唐草、西階段では桜があらわれている。内外とも保存状態はよく、改造も少なく、当初の姿をよく留めている。屋根には国立第三銀行を表わす「三」の字をデザインした鬼瓦も残る。

交通の分岐点という立地から、建築当時よりランドマークとして親しまれており、明治から大正期の建物が多く残る歴史的町並みのシンボルとなっている。

平成八年（一九六六）十二月、国の登録文化財になる。

大岳院

倉吉市東町
JR倉吉駅よりバス十五分、明治町
下車、徒歩五分

白壁土蔵群にほど近いところに位置する大岳院は、山号を万祥山といい、曹洞宗に属し、本尊は釈迦如来である。

慶長十年（一六〇五）に、米子城主・中村一忠なかつむらひとだの一族、中村栄忠が建立したといわれる。中村栄忠は八幡（現東伯町）城に入った父・中村一栄が死去したため、家督を継ぎ八幡から倉吉に転じた。亡父を三明寺村（現倉吉市）の廃寺であった山名寺を再興し弔った。しかし、小鴨川を渡って参拝する不便さから、天正の



頃（一五七三丁九二）に山名氏豊やまなうじとよの居館跡という現在地に寺を建立し、一栄の法名「万祥院殿大嶽周碩大居士」から山号・寺号が付けられた。

天正十四年（一五八六）に、中村一忠の死により中村家は断絶し、栄忠も追放され寺も一時衰退したが、寺領の寄進もあり隆盛になった。

境内には、山名氏豊と娘・駒姫こまひめを祀った駒姫八幡と、南総里見八犬伝のモデルとされる里見氏とその主従の墓がある。安房国（千葉）館山たてやま十二万石の城主・里見忠義さとみただよしは、慶長十九年（一六一四）に大久保忠隣事件に連座して公称三万石（実質四千石余）の倉吉に転封された。元和八年（一六二二）、忠義は二十九歳で堀村（現関金町）で死去した。遺言によって遺骨は当寺と一部紀州高野山に葬られた。

県指定保護文化財の中国明代の古三彩鉢皿が所蔵されている。これも里見忠義の遺言によって当寺に贈られたものといわれる。

倉吉パーク

スクエア

倉吉市駄縫寺町
JR倉吉駅からバス十五分
倉吉パークスクエア下車

倉吉パークスクエアは、中部地域の活性化を図るため平成十三年（二

〇〇一）四月にオープンした複合施設である。

ここには、ホールやセミナールームを備えた「倉吉未来中心」や日本で唯一の梨をテーマにした博物館「鳥取二十世紀梨記念館」、生涯学習の拠点施設として立市図書館、「倉吉交流プラザ」がある。

また、「温水プール」や飲食・物販施設の「食彩館」など、遊びの空間としても充実している。屋外には、遊具ゾーンのほか、ニホンリスのオープンケージなどがあり、小さな子どもから大人まで楽しめる。

開館時間

午前九時～（詳しくは各施設にお問い合わせください。）

休館日 月曜日、年末年始

問合せ先

☎0858・47・1184（代）

倉吉未来中心

倉吉市駄経寺町
JR倉吉駅よりバス十五分
倉吉パークスクエア下車

倉吉未来中心は、「人、もの」の交流、情報発信」をテーマに中部地域の活性化及び文化の拠点施設として整備され、平成十三年（二〇〇一）四月に開館した。千五百席の大ホールのほか、多目的に使用できる小ホー



ル、大・小合わせて九つのセミナールームが設けられている。

アトリウムは、高さ四二メートルの吹き抜けの空間で、この施設のシンボルになっている。木造で構成され、自然光を十分に取り込んだ温かみあふれる場所となっている。

また、鳥取県男女共同参画センター「よりん彩」などの公的機関も設置されている。

開館時間 午前九時～午後一〇時

休館日 月曜日、年末年始

問合せ先 ☎0858・23・5390

鳥取二十世紀梨記念館

倉吉市駄経寺
JR倉吉駅よりバス十五分
倉吉パークスクエア下車

平成十三年（二〇〇一）四月にオープンした文化・娯楽の複合施設「倉吉パークスクエア」内に設置されている。

梨をテーマにした日本で唯一のミュージアムで、鳥取県の代表的な農産物であり、二十世紀の県農業を支えてきた二十世紀梨をはじめ、世界の梨が紹介されている。

梨のルーツや歴史を紹介する展示をはじめ、鳥取県が二十世紀梨の特産地になるまでの歩みを映像やポポットでわかりやすく説明した劇場、世界各地の梨コレクション、梨を使ったさまざまな料理を試食できるキッチンギャラリーなど、見て、体験して、学べる施設となっている。

入口付近には、この施設のシンボルにもなっている、広がる枝の長さ二〇メートルもある国内最大級の二十世紀梨の巨木が展示されている。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 第三月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始

問合せ先 ☎0858・23・1174

史跡 大御堂廃寺跡

倉吉市駄経寺町
JR倉吉駅よりバス十五分
倉吉パークスクエア下車、徒歩三分

山陰最古級の寺院跡で、天神川と小鴨川の合流付近にある標高一六メートルの自然堤防上に立地する。古くから存在が知られ、江戸期の地誌にも記録がみえる。

平成六年（一九九四）からの発掘調査の結果、寺域や伽藍配置などが明らかとなった。

寺域は、南辺が不明だが東西一三五メートル、南北約二一〇メートルと地方寺院としては広大な敷地をもち、この南東寄りに主要な建物が配されている。東に塔、西に金堂、北に講堂が配され、回廊が、塔と金堂を囲み講堂につながっている。金堂は南北棟で東に面し、塔に向き合う形となる。この建物配置は、全国にも数例しかない官寺特有の「川原寺式」伽藍で、大御堂廃寺の寺格の高さを物語っている。金堂の基壇規模は、東西一二・三メートル、南北一八・四メートルである。塔は一辺九・六メートルあり、中央に心礎の抜き取り穴がある。講堂は、東西三二メートル、南北一六メートルである。講堂の北側には建物二棟が並置された僧坊がある。西築地塀中央付近では一メートル四方の井戸枠状の上水施設が見つかった。この木椀底部には木樋が取り付けられ、西側にある湧水地まで九六メートルのびている。瓦・土器類の他、木製品・金属製品なども見つかっている。鬼瓦は蓮華文と全身鬼面文がある。軒先瓦は

七世紀中頃から八世紀後半頃までのものが十数種類あり、なかでも七世紀後半頃の瓦類が最も多い。このころ伽藍が整備されたと推定される。墨書土器には郡名を冠した「久米寺」銘があり、寺名が明らかとなったばかりでなく公的な性格を帯びた寺院であったことを物語る。

銅製匙や銅製獸頭の金属製品も見つかった。匙の形状は正倉院宝物や韓国慶州市の雁鴨池出土品に酷似している。銅製獸頭は、国内外に類似品が見られないが朝鮮半島の銅を使用していることが科学分析で明らかになった。

官寺特有の伽藍配置や豊富で質の高い出土品などから、山陰地方を代表する貴重な白鳳寺院として、平成十三年（二〇〇一）に国史跡となった。



史跡 大原廃寺塔跡

倉吉市大原
JR倉吉駅よりバス
一〇分、大原下車、
徒歩一〇分

奈良時代の寺院跡。天神川下流の右岸段丘上に立地する。昭和九年（一九三四）、畑の開墾中に塔心礎が発見され翌十年に国史跡に指定された。塔心礎は、長径二・九メートル、短径二・八メートルの方形に近い石で、中央部に直径〇・六五メートル、深さ〇・一二メートルの孔がある。厚みはないが面径は山陰地方最大規模を誇る心礎である。

昭和六十年（一九八五）から六次にわたる発掘調査の結果、金堂が西に、塔が東に並列し、背後に講堂が位置する法起寺式伽藍配置を持つことが明らかとなった。創建時期は七世紀末頃と推定される。寺域は東辺が約八メートルあり、他三辺は七メートル前後と短く、地形に制約されたためかやや歪んだ方形区画である。講堂は掘立柱建物で、塔と金堂の中軸線より金堂側に寄って配置されている。この講堂の位置は、西北二キロ離れた大御堂廃寺跡や東伯町の斎尾廃寺跡と同じであり地域色のある建物配置となっている。大量の瓦類、土器類とともに、鴨

尾・塑像片・埴輪・金属製品などが発見された。このほか軒丸瓦と軒平瓦がある。創建時の軒丸瓦は大御堂廃寺跡と同型であり、影響があつたことを物語る。軒平瓦には、忍冬唐草文を飾るものがあり、山陰地方には数少ない瓦当文様として貴重である。埴輪は如来立像を二段三列に配した「六尊連立埴輪」形式である。寺域は現在、竹藪と果樹園になっているが、塔心礎は自由に見学することができる。

田内城跡

倉吉市殿城
JR倉吉駅よりバス一〇分、中部総合事務所前下車、徒歩十五分

『伯耆民談記』の田内城の項によれば、この城跡は田内の南「仏石山」の上であり、国府川筋の向並木の往還がそのころの城下であると記されている。それを証明するように、国府川底から柱や井戸、鍛冶・職員が出土したと伝えられている。

この地域は、現在の倉吉市・田内の東を流れる小鴨川と三朝方面から流れ下る竹田川の合流点となっている。交通の要路の地で見日町として知られていた。

田内城の城下町として開けた見日町は、内海の中にある「小都会」と

も伝えられ、殿町、大町、花町があったという。中世の時代では合流点に内海が形成され、現在より水量の豊富な川の中州に水上交通の拠点ができ、市が立ち人々が行き来したといわれる。『倉吉市誌』では、見日町について、「田内橋の下流より今津堰」に近い場所を推定し、ここが南北朝時代初めの守護所に近い町とみている。

史跡 三明寺古墳

倉吉市殿城
JR倉吉駅よりバス十五分、宮川町下車、徒歩十五分

市街地の北側に位置する向山丘陵の南側中腹に造営された円墳。直径一八メートル、高さ六メートルあり、山陰地方最大級の規模を誇る横穴式石室を持つ。横穴式石室は全長八・三メートルある。埋葬空間である玄室は、長さ三・七メートル、幅三・二メートルとほぼ正方形に近く、高さは三・一メートルと天井が高い。横穴式石室の構造は、正面奥に一枚の巨石を立て、その両側にやはり大きな切石を立てかけ、上部は別の石を石室側に内傾させて積み上げている。この古墳は古くから開口していたようで、発見当時、副葬品はなかった。切石を素材としていることと

石室構造からみて、七世紀初め頃の造営と考えられている。

この古墳の特徴は、玄室内に造られた石囲いである。奥壁に接して四枚の板石を長方形に組み合わせもので、現在は地蔵尊がその上に祀つてある。この石囲いは、熊本県などに分布する石室内に設置された「石屋形」と呼ばれる棺構造に類似している。正面の板石は、地蔵尊をのせるために立てられたらしく、本来は入り口に向かつて口を開いたコ字形に組み合わせ、その上に蓋石をのせ床には小礫を敷いていたものと思われる。この石屋形状の施設は、鳥取県内には類例のない特異なもので、三明寺古墳の造営者が西北九州の有力者と密接なつながりをもっていたことを物語る。

墓制変遷を知る上で貴重な古墳であることから、昭和六年（一九三二）に国史跡に指定されている。

史跡 石塚廃寺跡

倉吉市石塚
JR倉吉駅よりバス三〇分、石塚入口下車、徒歩一〇分

天神川の支流、小鴨川左岸の河岸段丘上に位置する奈良時代の寺院跡。墓地のなかにある塔心礎とその北側約一七メートル離れた位置に金

堂跡と推定される基壇状土盛が存在する。塔跡と金堂跡が南北に連なることから、主要建物の配置は堂・塔

が一直線上に並び四天王寺式とみられる。塔心礎は、長径約二・四メートル、短径二メートルの大きさで、中央に直径〇・七メートル、深さ〇・二メートルの柱を据える円孔がある。金堂跡と考えられる基壇は、東西一六メートル、南北二メートルの規模で数個の礎石が残っている。軒丸瓦二種類と軒平瓦一種類が出土し、いずれも八世紀前半代の型式である。軒丸瓦の一つは、大きな中房の周囲に十六の短い蓮弁を配しているのが特徴である。この瓦は、伯耆国内には類例がなく、吉備津彦神社（岡山市）境内にある奈良時代の寺院跡出土瓦に似ている。軒平瓦は、忍冬唐草文を飾る珍しいもので文様の祖型は奈良法隆寺の軒平瓦にある。昭和三十一年（一九五六）、県の史跡に指定されている。

山名時氏

山名氏の祖は、新田義重の長子・義範に始まり、義範が上野国緑野山名庄に住んだことから、山名を称号

したといわれる。

『寛政重修諸家譜』には、義範六世を義氏とし、義氏ははじめに新田氏、後に足利尊氏に従った。足利方の部将として知られた山名時氏は、「大將軍山名伊豆守」と見えるのがはじめで（建武三年七月二日付け、平子重嗣軍忠状）、大將軍山名時氏に中国地方の諸氏が従っていたようである。建武三年（一三三六）頃の伯耆守護は石橋和義であったが、その後、山名時氏が守護に任ぜられたと考えられる。

建武四年に伯耆に入部した時氏は守護代・小林左京亮を通して伯耆国支配を強化し、守護領の拡大をはかった（三宝院文書）。

初期の足利政権にあつて、尊氏の執事・高師直と尊氏の弟・直義が反目、観応元年（一三五〇）幕府は分裂し、中央官僚と地方の守護のほとんどを巻き込んだ争乱に突入した（観心の擾乱）。

時氏は、観応二年（一三五二）直義、次いで足利直冬とともに南党となった。『太平記』によれば、山名時氏・師義父子は宮方の御旗を掲げ（南党として）富田判官、伊田、波多野、矢部、小幡の諸氏も同意し

たので、「伯州、雲州、因州、作州」四か国を勢力下に治めた、といわれる。

『伯耆民談記』には、時氏の拠点の一つとして久米郡田内城（現倉吉市殿城）があげられ、田内城から南西約二キロの地にある打吹城を記している。

打吹城は標高二〇四メートル、東伯耆三郡の一つ久米郡のほぼ中央に当り、伯耆国衙に近い地域である。反幕府の旗幟を明らかにし、中央政府に対抗した時氏父子は、一〇年後の貞治二年（一三六三）幕府と和解した。『太平記』に、この時、時氏が安堵された五国として、因幡、伯耆、丹波、丹後、美作とある。

『太平記』によると、山名時氏は伯耆・丹波守護であるが、山名一族で前記の五か国の守護職を認められていたことになる。

極楽寺のシダレザクラ

倉吉市八屋
JR倉吉駅よりバス五分、八屋下車、徒歩五分

このシダレザクラは、鳥取県下最大のものである。明治元年（一八六七）、伊木の庄屋の涌嶋氏が苗木を二本取寄せその一本を境内に植えたもので、寺の門を入って左側にある。樹高は一六メートル、胸高直径は

八四センチあり、主幹は途中で大きく二つに分かれ、さらに無数に分枝して南に二五メートル、東西二〇メートルのドーム型に広がり、末端の枝は細くて垂直に下がる。花は淡紅色で赤味が強く、一芽に三つ四個咲く。花径は小さく花弁は一枚、開花期は三月下旬から四月上旬である。

良質の土壌に恵まれ、樹齡が百年を過ぎても樹勢が良く、毎年華麗な花をみせ見物客でにぎわつ。「とつとりの名木百選」に選ばれている。



波波伎神社

倉吉市福庭
JR倉吉駅よりバス一〇分
福庭車庫下車、徒歩十五分

事代主命・下照姫命・天雅彦命など九神を祭神とする。

『延喜式神名帳』の河村郡二座の内「波々伎神社」と考えられる。伯耆二宮とも、五社大明神とも小松大明神とも称され、失火・落雷などで

幾度か焼失・再建がくり返された。明治元年（一八六八）に、現神社名に改称された。

当社の神官を務める船越家は、『大同類聚方』に記載されている吹出物、やけど、打身などにきく秘伝の「伯耆薬」の製法を伝承していたが、現在は造られていない。

境内には福庭古墳と国指定天然記念物の社叢がある。

史跡 福庭古墳

倉吉市福庭
JR倉吉駅よりバス一〇分
福庭車庫前下車、徒歩十五分

古墳時代後期の古墳。大平山から西に延びた丘陵の先端部近くの伯耆二宮・波波伎神社境内に位置する。直径三五メートル、高さ四メートルの円墳で埋葬施設として横穴式石室をもつ。石室の全長は九・五メートルあり、玄室は長さ一・九メートル、幅二・二メートル、高さ一・三メートルである。

石室は、奥壁と側壁に表面を整形した大きな石を立て、その上に梁状の石を石室内側にせり出して据えている。壁石の接する個所には段をつけて組み合せ、玄門に架かる天井石には玄門石をはめ込むためのほぞ穴を設けるなど石室構築に精度の高い

石工技術が反映されている。玄門近くの床面には、石障と呼ばれる遺骸を安置する場所を区画するための横長の石がある。

奥壁の上部には、赤色顔料による鋸歯文（連続三角文）が認められる。装飾を施した古墳は、県内東部から中部にかけて偏在するが、その多くは線刻によるもので顔料を使った彩色装飾は県内では珍しい。

古くから開口していたため、発見当時副葬品はなかったが、古墳の形がやや角張り方墳気味であることや石室の用材加工技術や構築方法などからみて七世紀代の築造と考えられる。倉吉地方における横穴式石室の変遷過程を知る上で貴重な古墳であるとして、昭和三十一年（一九五六）、県の史跡に指定された。

大日寺

倉吉市桜
JR倉吉駅よりバス四十五分、楼下車、徒歩一〇分

市街地から田園風景が続くなかを西へ向かって八キロメートルほどいったところにある。寺伝によると、承和八年（八四一）に僧円仁慈覚大師が創建したといわれる、天台宗の古寺である。永延二年（九八八）には、恵心僧都が再興したといわれる

が、正確なところはわからない。

所蔵される旧国宝・阿弥陀如来坐像は、高さ一一・六六メートルで鎌倉時代の作で、胎内に「嘉祿二年卯月」の銘文のある立派なものである。

また、寺の西方、極楽円地坊から多くの瓦経が出ていた。経文を後代にまで保存するために、土の柔かいうちに経を硬筆のようなもので書いて、堅焼きしたと考えられる。延久三年（一〇七一）の文字も見え、筆者も記されている。史料として貴重なもので、その一部が当寺に所蔵されている。

なお、寺から〇・五キロメートル程離れた所に五輪塔が群立している。なかには源頼朝の墓と伝えられる、鎌倉時代の立派なものもある。

また、この五輪塔群の中に、昭和三十一年（一九五六）三月に県の天然記念物に指定された、樹高三〇メートル、樹齡千年のみことな大イチョウがそびえている。

この鐘が出雲（島根県）の鰐淵寺にあって（寿永二年の銘）重要文化財に指定されている。

岩倉城跡

倉吉市岩倉字
J R 倉吉駅よりバス四〇分 岩倉下
車、徒歩四〇分

小鴨城とも呼ばれ、岩倉集落の南東にあたり、標高二四七メートルの通称「城山」に所在する。小鴨氏累代の居城であった。城山は東側で、ほかの山並みにつながるものの半孤立した山で、南側の山裾には岩倉川が流れている。

城跡の遺構は、山頂部と北西側の山麓部に見られ、山頂部は南側の最高所に主部を置き、南部を除く各方面に大小の曲輪を配置している。

『小鴨系図』は、小鴨掃部頭基仁が岩倉城に寄つたと伝えている。また、基保は平氏の軍勢催促に従つたと、『玉葉』にみえる。これにより、源平の戦いが全国的に波及していた時代に、伯耆国の在庁官人であった小鴨氏は、前国主であった平氏の指示に従つたことがわかる。

小鴨氏の本拠は、久米郡小鴨郷である。鎌倉時代の正和五年（一一三一六）、六波羅御教書案に、小鴨左衛門尉とみえているその人は、伯耆守護代と考えられている。室町時代の伯耆守護山名氏のもので、守護代として知られるから、この時代にも伯耆

地方の有力国人であった。

永昌寺

倉吉市岩倉
J R 倉吉駅よりバス四〇分 岩倉下
車、徒歩二〇分

永昌寺は、山号を久宝山といい、曹洞宗に属し、本尊は十一面観音である。開山の年代は不明である。岩倉城主であった小鴨氏の菩提寺でもあった。天正十年（一五八二）に同城が落城したとき、当寺も兵火にかかり焼け落ち、縁起など一切を焼失してしまつた。寛永五年（一六二八）に再興された。

境内には県指定文化財の石造「岩倉十三重の塔」がある。高さが三七メートルで、製作されたのは鎌倉中期と推定される。これは岩倉城の南の谷を隔てた山裾から出土したもので、十三重塔と並んで立つ三基の宝塔も同じ所から出土した。出土地近くの「奥の院」という所に大寺院跡が残っている。これも小鴨氏に関わる寺院跡と考えられている。

国庁裏神社

倉吉市国分寺
J R 倉吉駅よりバス二〇分 国
府下車、徒歩十五分

国庁裏神社は、大己貴命などを祭神とし、文字通り伯耆国庁の裏に鎮座した。「コクチヨウリ」とも「コ

クチヨウノウチ」とも読まれた。創社年代は不明だが、国司が伯耆国内の神々をここに勧請し、伯耆の総社として祀り参詣したものと考えられる。

『伯耆民談記』によると、祭礼は伯耆国造の系譜を引くという石川家が司祭し、中世末、同家が滅亡するまで続いたといわれる。また、不入岡の国造屋敷と当社とを結ぶ道は、国造道と呼ばれたと伝える。

近世末まで惣社・総社大明神といわれ、国分寺村の産土神でもあった。また、藩の祈願所でもあった。明治維新時に、現社名に改称された。

史跡 伯耆国庁跡

J R 倉吉駅よりバス二十四
分 農高前下車、徒歩八

国庁とは、奈良時代に中央から派遣された役人（国司）が地方政治を行う拠点であり、現在でいえば県庁にあたる。伯耆国では当時の中央である奈良により近い東部の久米郡八代郷（現在の倉吉市社地区）に置かれた。

伯耆国庁跡は、倉吉市国府集落の南西側にあたる標高約四〇メートルほどの低丘陵上に立地する。東約三〇〇メートルには、国分寺跡と国分尼寺跡（法華寺畑遺跡）がある。

国分寺跡の発掘調査を契機に、農道を切通し、崖面にみられた柱穴が注目を集め、昭和四十八年（一九七三）から昭和五十三年（一九七八）まで六次にわたる発掘調査が行われた。

国庁は、主要な建物が設けられる国庁域（内郭）とその周囲の国衙域（外郭）とから構成されている。

国衙域は、東西二七三メートル、南北二二七メートルの規模で、四方が溝で区画されている。東辺に、東西五メートル、南北二四九メートルの張り出し部がある。これは、中央政治の拠点である平城宮と同じ構造である。

国衙域の中央部には溝で区画された東西八四メートル、南北九三メートルの国庁域が設けられている。国庁域の発掘調査により、主要建物の規模や配置、そして八世紀後半から十世紀初頭頃までの四時期に及ぶ変遷過程が明らかとなった。

《一期》八世紀後半。国衙が創建された。国庁域は、掘立柱建物堀により東西八四メートル、南北九四・五メートルに区画され、中に南門、南北に前殿、正殿、後殿を配し、東西には脇殿とその南側に楼閣風建物が設けられた。これらはすべて掘立柱

建物で左右対称に配置されている。

《二期》九世紀初頭。正殿と後殿の規模を若干大きくし、東西脇殿の北側には楼閣風建物が新たに配置された。

《三期》九世紀中頃。伯耆国衙が最も整備された時期である。国庁域の周りに溝を掘り、内側に築地塀をめぐらしている。東西八四メートル、南北一〇六メートルに区画し奥行きを拡張し、建物は南門以外すべて礎石建物に建て替えられた。また、南門から正殿の間をバラス敷の舗道とした。

《四期》九世紀末から十世紀初頭。国庁域を区画する溝を埋めて西と南に拡張し、東西一一メートル、南北二六メートルに区画した。建物配置と規模はそのままである。

このように伯耆国庁は、八世紀後半に掘立柱建物を主体として造営されたものが、九世紀初頭には礎石建物として整備され、十世紀頃には終末をむかえたことが明らかとなった。

土器類、瓦類の他に鉄製鋤先や八稜鏡鑄型・帯金具など、官衙特有の遺物がみられる。土器は食器類が大半を占め、なかには伯耆国内の



郡名を記した「川村」や人名と思われる「人麻呂」などの墨書土器もある。瓦類は、南門付近と楼閣風建物周辺からの出土がほとんどで、主要建物は瓦葺きではなかったと考えられる。また、五枚が重なって出土した鋤先は、未使用状態であり、建物建設に先立つ地鎮具との見方もある。「瑞花双鳥文鏡」と推定される八稜鏡鑄型の出土は、国衙に付属する官営工房跡があったことを示すものである。

昭和六十年（一九八五）に、国分尼寺と推定される法華寺畑遺跡を含めて国史跡に指定された。その後、国庁の北東に位置し倉庫群の建ち並

ぶ不入岡遺跡の存在が明らかとなり、この遺跡は納税のための物資収納施設であるという性格付けから国府関連遺跡と考えられ、法華寺畑遺跡も含めて、平成十二年（二〇〇〇）に「国史跡伯耆国府跡国庁跡 法華寺畑遺跡・不入岡遺跡」となった。

現在、国庁跡と不入岡遺跡は未整備であるが、法華寺畑遺跡では四脚門（西門）と板塀の一部が復元されている。また、遺跡の全体像がわかるように、遺構復元模型も設置するなど歴史学習の場となっている。

史跡 伯耆国分寺跡

倉吉市国分寺・国府
JR倉吉駅よりバス
二十四分、農高前下
車、徒歩八分

国分寺は、奈良時代に聖武天皇の発願により国ごとに建てられた官立の寺院である。伯耆国分寺は、伯耆国の東部にあたる倉吉市国分寺集落の北側、天神川の支流国府川左岸の低丘陵上に建立された。

この辺りは古くから古瓦が出土するので、国分寺の所在地と考えられていたが、県道改修工事を契機に昭和四十四年（一九六九）、塔跡の位置が明らかとなった。その後、昭和四十五年（一九七〇）から四十六年

にかけて三次にわたる発掘調査が実施され、金堂・講堂などの主要伽藍を特定することができた。

寺域は、東西一八二メートル、南北一六〇メートルの長方形に区画され、周囲に幅三メートル、深さ一メートルの溝を廻らし、東西と北には土塁・築地塀を造り境界としている。中心伽藍は、寺域の西寄り三分の一のところに南門・中門・金堂・講堂が南北一直線に配置されている。塔跡は、南東隅に位置する。寺域内からは、鬼瓦をはじめとして大量の瓦類と塔の軒先四隅に取り付けられていた風鐸、僧侶の修行用具である錫杖頭そして土師器・須恵器が出土した。創建期の軒瓦は、伯耆国分寺特有の瓦当文様で、なかには淀江町の上淀廃寺跡所有瓦の系統をひくものもあり、国分寺造営が伯耆国内の有力者の力を得て行われたことを示すものとして興味深い。

古記録（『続左丞抄』）によれば、伯耆国分寺は、北隣する国分尼寺内の倉の失火により天曆二年（九四八）に類焼したと伝えられ、発掘調査においても遺構や遺物に火災の跡が見受けられる。昭和四十九年（一九七四）、国の史跡に指定された。

不入岡・ 国分寺の石仏

倉吉市不入岡・国分寺
JR倉吉駅よりバス二〇分
分、国府下車、徒歩一〇分

不入岡集落西側の家並みの途切れた北端にある石仏。小礫を含んだ長方形土盛の北西隅に位置する。高さ一・二メートルの舟形の安山岩に二体の像が上下に半肉彫りされている。上の像は、舟形の光背を負い蓮台に定印を結んで端座する阿弥陀如来坐像である。蓮華の彫り出しは細かく丁寧である。下の像は、合掌した僧形の坐像で上の如来坐像よりやや大きめに彫り出されている。

像の両側に銘文があり、右には、「永和元乙卯年十一月 日」、左は、「願主道意」とある。永和元年（一三七五）は、南北朝時代の北朝系の年号を示す。造像願主は名和長年の四男笠見四郎行忠とする説もある。



「道意」という僧が阿弥陀如来を礼拝する姿をあらわす室町時代初期の希少な石仏である。昭和三十一年（一九五六）、県保護文化財に指定される。

伯耆国分寺の石仏は、現在倉吉市立社小学校敷地内にあるが、もとは伯耆国分寺跡にあった。石仏は五体あり、長方形の輝石安山岩に彫られている。高さは四〇〜八〇センチで、幅は二八〜三七センチある。薬師如来を中心とした日光・月光菩薩ではないかとの見方もあるが定かではない。顔を印象強く表現しているが、身体表現は彫りが浅く平板的である。

石仏二体の裏面には、幅約九センチ、深さ五センチの溝があり、この石仏が伯耆国分寺跡の塔の基壇地覆石を転用して造られたものであることが塔跡の発掘調査時に判明した。造られた時期は不明だが、表情のユニークな石仏として昭和三十一年に県保護文化財に指定される。

阿弥大寺 墳丘墓群

倉吉市下福田
JR倉吉駅よりバス二〇分
上福田下車、徒歩十五分

弥生時代後期の墳丘墓。丘陵先端近くの河岸段丘上に立地する。長方

形の墳丘の角が突出する「四隅突出型」と呼ばれる墳丘墓三基からなる。昭和五十四年（一九七九）、五十五年（一九八〇）に農地造成事業に伴い発掘調査が行われた。

河川に向かって緩やかに傾斜する北側斜面を削って平坦面を設け、東西に連ねて築かれている。東側の一号墓は、東西一三・七メートル、突出部を含めた長さは一七・八メートルある。墳丘斜面と突出部には、川原石の貼石が施されている。突出部上面には、比較的平らな石を据え、飛び石のごとく並べている。埋葬施設は、墳丘に二基と墳丘外に十二基の土壇墓があり、いずれも副葬品はなく、数基の土壇墓に供献土器が見られる。

二号墓は一辺六・四メートル、突出部を含めた長さは八メートル、三号墓は一辺五・五メートル、突出部を含めると七・八メートルある。一、二号墓とも貼石や突出部の状況は一号墓とほぼ同じであるが、規模が小さい。

四隅突出型墳丘墓は、中国山地の三次平野に出現し、出雲地方を中心にその発展型が分布する。妻木晩田遺跡にみられるように多くは眺望のきく丘陵高地に立地するが、本墳丘

墓は標高の低い河岸段丘上に築かれている。突出部が優美に伸び、しかも通路としての機能を持つことから、この種の墳丘墓の祖型を示すものとして昭和五十六年（一九八一）に国史跡に指定された。



倉吉絨 展示即売処

倉吉市新町一丁目
JR倉吉駅よりバス約
十五分、明治町下車、徒
歩三分

私邸の一部を開放して、昭和五十七年（一九八二）七月に開設された。作品は、地元の特産物や工芸品などを展示、販売する「赤瓦」内でも取り扱われている。

展示室には、反物、のれん、タピストリ等が飾られ、予約をすれば機

織の実演を見ることが出来る。

問合せ先 ☎0858・22・3360

倉吉緋舎

倉吉市福庭
JR倉吉駅より徒歩一五分

私邸に設けられた倉吉緋の展示施設。開設者は自ら倉吉緋を織り、長年研究してきた。開館した昭和五十四年（一九七九）以来、来訪者に解説を行い倉吉緋の美しさを伝えている。

入館を希望する場合は予約が必要。
問合せ先 ☎0858・26・6203

倉吉の鋳物師

鋳物とは、金属を溶かし、鋳型に流し込んで道具を作る技術のことです。こうした技術を持つ職人を鋳物師という。倉吉の上小鴨地区では、中国山地の鉄と、近隣の山から取れる炭、小鴨川の川砂を背景に、鋳物業が発展してきた。

なかでも、上古川の齋江家は寛永三年（一六二九）創業と伝えられ、昭和二十年（一九四五）まで約三百年続いた鋳物師職人の家系である。生活に欠かせない鍋釜、鉄瓶から寺院の梵鐘まで生産している。特に「齋江ガンス」と呼ばれる茶釜が多

く流通していた。

齋江家は、鋳物師廃業後、資料の保存に務め、原材料から鋳造用具、関係文書など多岐にわたる資料を収集した。この齋江家の資料は、昭和六十年（一九八五）に国の重要有形民俗文化財に指定された。倉吉市の歴史民俗資料館（倉吉博物館）でも、その一部を展示公開している。

牛玉さずけ

倉吉市仲ノ町

打吹山の中腹に位置する天台宗の古刹、長谷寺で毎年旧暦の一月十八日（本尊十一面観音の初縁日）に行われる行事。

長谷寺が発行する「牛玉」という棒状の御守りを参拝者が競って奪い合う。牛玉とは、この地方でウツギと呼ばれる木を芯にして、長谷寺の御本尊の真言やさまざまな呪文が書かれてお守りで、平年は十一本、閏年は十三本と一年の月数だけ授けられる。

牛玉には、それぞれ副賞として酒や米の商品がつき、牛玉を授かった者は、福を分け与える意味で、商品の酒や米を近所や知り合いに分ける慣わしになっている。

かつて牛玉さずけの夜には、参道

に露店が立ち並び、おおいに賑わった。現在も、翌朝に東仲町・西仲町の商店街で観音市が開かれ、農具や竹製品、苗木などを求める人々の姿が見られる。長谷寺の牛玉さずけは、鳥取県中部地方の住民にとって、春を知らせる行事でもある。

くだがゆ（管粥）神事

旧暦の小正月に行われる占いの神事。竹筒を粥とともに炊き、粥の詰まり具合によって、翌年の農作物の豊凶を占う。

倉吉市生田地区では、現在、地区あげての行事として伝承されている。行事は「神男」と呼ばれる人物を中心に進められる。神事には、一年を表す一升二合（閏年は一升三合）の米と、早稲・晩稲・小豆など作物を表す十数本の竹筒が用意される。

初日は、生田神社の籠もり堂で神男の指示に従い、竹に米を詰め粥を炊き上げる。翌日、粥は生田の水谷家に運ばれ、神男が竹を一本一本割って作物の出来高を発表する。この結果は紙に書かれ、氏子に配られる。西伯郡中山町逢坂八幡でも旧暦の

小正月に神官の指示のもとで同様のくだがゆ神事が行われる。

橋田邦彦

橋田邦彦は優れた生理学者であり、戦前に文部大臣を務めた。

明治十五年（一八八二）、久米郡倉吉（現在の倉吉市）の漢方医・藤田家に生まれ、十六歳のとき橋田家の養子となった。

東京帝国大学を卒業後、四年間にわたってドイツ、オーストリア、フランスなどに留学して生理学を専攻した。帰国し、東京帝大医学部教授としてわが国の生理学の基礎を築いた。昭和十二年（一九三七）、第一高等学校長を兼任した。昭和十五年（一九四〇）から十八年まで文部大臣を務めた。昭和二十年（一九四五）終戦を迎え連合国軍から戦争犯罪人としての指名を受け、自決した。

橋田邦彦は、禅の哲学を背景に西洋の自然科学をとらえ直そうと試みた。『正法眼蔵釈意』『空月集』などの著書で説いている。

倉吉市内打吹公園に、「学道不二唯従自然」と彫られた顕彰碑が建立されている。

河本緑石

河本緑石は、教員のかたわら自由律俳句をはじめ現代詩、評論、油絵、俳画などの分野で才能を発揮した。

明治三十年（一八九七）、東伯郡社村福光（現在の倉吉市福光）の地主の家に生まれた。本名は義行。読書好きな少年で、中学生のときから自由律俳句を作っている。

盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）で、宮澤賢治らと文芸同人誌『アザリア』を発刊した。緑石は毎号、俳句や詩、随筆を発表している。宮澤賢治とは生涯変わらぬ親交を結んだ。

大正十年（一九二一）帰郷した緑石は、中学校の図画教諭・中井金三を中心に結成された芸術団体「砂丘社」に参加した。絵の展覧会や写生会、音楽会、雑誌の編集、講演会など多彩な活動を展開し注目された。

鳥取県立農学校（現在の県立倉吉農業高等学校）に勤務し農産加工、武道などを受け持ち、熱心な教員として生徒からの信望も厚かった。昭和八年（一九三三）七月、水泳訓練中の同僚を救助しようとして亡くな

った。三十七歳だった。

主な著書に、詩集『夢の破片』、評伝『大空放哉傳』、句集『大山』がある。

県立倉吉農業高等学校の敷地には「あらうみのやねやね」、倉吉市国府には「風が落すもの拾ふてゐる」の碑があり、緑石の詩魂を讃えている。

中井金三

中井金三は、芸術団体「砂丘社」を通して先進的な芸術運動を展開し、鳥取県における芸術文化の発展を促した。

明治十六年（一八八三）、鳥取県久米郡中河原村（現在の倉吉市中河原）に生まれた。同三十八年（一九〇五）、東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部）に入学し、西洋絵画の新風に触れ画家を志したが、家業が倒産したため断念した。大正二年（一九一三）、倉吉中学校（現在の県立倉吉東高等学校）に図画教諭として着任し、芸術の最新の表現を説き、生徒の前田寛治らに刺激を与えた。

大正九年（一九二〇）に設立した砂丘社には、前田寛治、河本緑石、

前田利三らがメンバーとなり、展覧会や写生会、音楽会、舞踏公演など幅広い分野で活動し刺激した。

昭和四十四年（一九六九）に八十五歳で死去するまで若い世代を導いた。

羽合町

橋津海岸

東伯郡羽合町橋津
JR倉吉駅よりバス二〇分

東伯郡羽合町橋津川付近の海岸。海水浴場南側は山が迫り、急な崖が連続している。この崖は、かつて海面が上昇していた頃の海岸線で、当時に形成された海食洞（離水海食洞）と海食崖（旧海食崖）がみられる。この崖の底面の高さは二〜七メートルあるので、この高さ分だけ海面低下が起きたものと考えられる。離水海食洞の前面には砂丘砂が堆積している。橋津海岸東側の少し内陸には、新生代鮮新世安山岩からなる標高一〇七メートルの馬ノ山がある。

また、離水海食洞近くにはトウテイランの自生地がある。

橋津海水浴場があり、夏場には多くの海水浴客でにぎわう。

トウテイラン

トウテイランはゴマノハグサ科の多年生草本で、漢字で洞庭藍と書く。江戸時代には園芸植物として有名

であったが、中井猛之進博士の所見によると、この園芸用はトウテイランではなくヒメトウテイランで、ヨーロッパ産の輸入品であったようである。

トウテイランは日本に生育し、丹後、伯耆、隠岐など日本海沿岸（羽合町橋津、泊村小浜海岸）に自生する乾性植物である。昭和五十二年（一九七七）、羽合町の天然記念物に指定された。希少な植物であることから保護が必要となっている。

温泉 羽合温泉

東伯郡羽合町上浅津
JR倉吉駅よりバス十五分

風向明媚な東郷湖の北西部にある温泉。鳥取県に多い山間の温泉地と違って、平坦な田園が湖に突き出したような地形にあり、湖面を渡る風もかるやかである。周囲に海水浴場やスポーツ公園もあり、多様に楽しむことのできる温泉地として発展してきた。

十一の源泉があり、東郷湖にも二本の源泉がある。平均温度は五五・三度、湧出量は毎分二、九三八・五リットル。泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物、硫酸塩泉である。東郷湖周辺の沖積層の下に凝灰岩や

安山岩からなる第三紀層があり、その下には花崗岩がある。それらに発達する割れ目に沿って温泉水が湧出している。現在、温泉は集中管理されている。

羽合温泉の歴史は、天保十四年（一八四三）、地元の人が鳥取藩主へ湖中の泉源利用を願い出たのが最初である。慶応二年（一八八六）、上浅津の湯村幸助が池の中に孟宗竹を差し込んで湯を集め、四斗樽に貯めて湖上温泉を楽しんだという。

明治時代になって上浅津で掘削に成功し、幸助が掘って成功した「幸助湯」などが基礎になり発展した。中でも「山陰ホテル」は、山陰地方



初のホテル形式の温泉旅館であった。昭和四十年代末になって増改築が進み、伝統的な旅館がビル形式の大型宿泊施設へ変わっていき、県下でも有数の温泉地になった。

昭和五十三年（一九七八）、浅津温泉から羽合温泉に名称が変更された。かつては、JR松崎駅から船で旅館へ向かっていたが、現在は国道九号から訪れる人が多い。

周辺では、東郷湖羽合温泉臨海公園の整備が進み散策に格好の場となっている。また、湖岸には東郷湖で漁をする船の船溜まりがあり、漁船の姿も湖上の風物詩になっている。このほかに、橋津古墳群をはじめ長瀬高浜遺跡などの遺跡が多数ある。

温泉 ハワイ ゆくたうん

東伯郡羽合町上浅津
JR倉吉駅よりバス二〇分、羽合町老人センター前下車

羽合温泉を利用した施設で、平成五年（一九九三）六月に開設された。大、中、小の三つのタイプの浴槽があり、明るくゆつたりとした造りになっている。施設内には、娯楽室やホールも備えられている。

周辺には、東郷湖羽合臨海公園があり、スポーツで汗をかけた後の入

浴にも適している。

開館時間 午前九時～午後九時まで
入浴は午後八時三〇分まで

休館日 第一・三火曜日、それ以外の火曜日は午前休み

問合せ先 ☎0858・35・4919

ハワイ風土記館、伯耆ロマンの里・馬ノ山公園

東伯郡羽合町上橋津
JR倉吉駅よりバス約二〇分、ハワイ海水浴場下車、徒歩二〇分

馬ノ山は、山陰最古最大級の馬ノ山四号墳があるほか、鳥取城を攻めた羽柴（豊臣）秀吉が御冠山に布陣し、吉川元春軍と対峙した所としても知られる。また、三朝東郷湖県立自然公園内にあり、眺望はすばらしく、一帯は、平成元年度（一九八九）から三年度にかけて、伯耆ロマンの里・馬ノ山公園として整備された。

平成四年（一九九二）四月には、埴輪と城をイメージしたハワイ風土記館が、馬ノ山の頂上に設置された。五階建ての施設には、遺跡から出土された土器や鎌倉時代の東郷荘（荘園）の様子を記した「伯耆国河村郡東郷庄下地中分絵図」などの歴史関係資料が展示されているほか、東郷湖や羽合平野が一望できる三六〇度のパノラマ展望室がある。

開館時間 午前九時～午後四時

休館日 月曜日・祝日・年末年始

問合せ先 ☎0858・35・2242

名勝 尾崎氏庭園及び尾崎家住宅

東伯郡羽合町宇野
JR倉吉駅よりバス
三〇分、宇野東口下
車徒歩五分

庭が造られたのは江戸時代中期と考えられる。約三十二坪の小池泉鑑賞式の庭園で、主屋の書院に座して見ると、向かって左にいり込みを見せ、ここに枯滝の石組を置く。石組は三尊形式で、中央の高さ八〇センチの立石を本尊に、左右それぞれ三センチと二センチの横石が配されている。中央部には出島が作られ、右方に長く流れを導き、池泉には亀島が突き出ている。池泉に向かつて手前右角には、近くの海岸で取れた安山岩の自然石を利用した手水鉢があり、水面に雲や周囲の風景を写し、風雅な趣を醸し出している。立派なクロマツがあるほか、モッコクの大木やソテツ、地元産のツバキなど三十種を数える。

なお、主屋の建築年代は明らかでないが、作庭と同時期と考えられる。現在の家構は、梁間八間、桁行十一間で、梁間、桁行ともに三分された九間取の形式になっている。広間型五間取を原形とする考え方もある



が、広間部分の表側に式台が設けられ「げんかん」と呼称されていること、「なかのま」が仏間を控えた客室の次の間と考えると、江戸中期・明和頃に発展する整形六間取が原形で、裏側に拡張が行われたと考えるのが妥当だろう。茅葺き屋根は勾配がきつくとどっしりとした構えである。屋根形式はいわゆる伯耆型の奇棟となり、大棟に檜煙出しが設けられている。

庭に開く客間は書院形式の室で、二方を巡る縁は二段となり、庭園と客間のつながりをより色濃くしている。昭和十二年（一九三七）十二月、国の名勝に指定されている。

馬ノ山

東伯郡羽合町橋津

馬ノ山は、三朝東郷湖県立公園の東北、橋津の東にある一〇七メートルの小山である。現在の馬ノ山は、多くは畑となりなだらかな丘陵をなしているが、鎌倉時代中期の東郷庄下地中分絵図によれば「馬野」と記されている。馬野は牧で、そこに馬が放牧されていたことがわかる。絵図に描かれている馬は、全部で十二頭、領家分五頭、地頭分五頭で、二頭が一宮領のものである。

天正九年（一五八一）、織田信長の部将・羽柴（豊臣）秀吉は、鳥取城に派遣されていた毛利方の城将・吉川経家ほか、因幡国人の籠もる同城を包囲した（第二回鳥取役）。

経家を救援するために、吉川元春は諸隊を率いて馬ノ山に布陣した。この折、元春は、橋津川の軍船をかえし東進の決意をしたといわれる。

一方、鳥取城を陥れた秀吉の大軍は西進して鹿野を経て、東郷湖の東標高一八六メートルの御冠山（東郷町宮内）に陣した。この折の馬ノ山の備えを見た秀吉は元春の決心を察知し、御冠山の本陣を払って鳥取に

帰ったといわれる。元春方も、これを追撃せず軍兵をまとめた。

当地における東西二大勢力の衝突は避けられたが、馬ノ山の布陣は、元春の背水の陣として伝えられている。

史跡 橋津古墳群

東伯郡羽合町上橋津
JR倉吉駅より車で二〇分

東郷湖の北側に位置する古墳群。標高一〇六・九メートルの馬ノ山から北西に延びて日本海に突き出す丘陵の先端部に立地する。馬ノ山古墳群とも呼ばれる。

古墳時代前期から後期にかけて築造された前方後円墳五基、円墳十九基、墳形不明一基の計二十五基からなり、そのうち十四基が昭和三十三年（一九五七）に国史跡に指定された。

古墳群のなかで最大規模の四号墳は、前方部の一部が削り取られているが、現存長八八メートルの前方後円墳である。昭和三十一年（一九五六）の発掘調査で竪穴式石室・箱式石棺・埴輪棺などの埋葬施設が十基以上明らかとなった。竪穴式石室は、全長八・五メートルと全国でも最大級の規模を誇り、石室内から中国製の三角縁神獸鏡他五面、鉄剣・鉄刀

や石製腕輪（車輪石・石釧）など豊富な副葬品が発見された。これらの副葬品は畿内色の強いもので、大和政権と密接な係わりをもっていた伯耆地域の首長の墓と考えられる。この四号墳のさらに西側丘陵突端部に全長六メートルの前方後円墳（二号墳）がある。未調査であるが、四号墳より立地的に好位置を占め、前方部が古相を示す撥形（はちだ）であることから、四号墳より先行して築造されたとの考えもある。いずれにしろ共に古墳時代前期に築造されたものである。

古墳群には、古墳時代後期築造の横穴式石室墳も含まれ、古墳時代の全期を通じて形成された古墳群であることがわかる。一帯は公園として整備されており、丘陵の高所に設置された展望施設には、古墳からの出土品を写真パネルで展示するなど古墳群のガイダンス施設ともなっている。

橋津の藩倉

東伯郡羽合町橋津
JR倉吉駅よりバス約十五分、
橋津中央口下車、徒歩五分

橋津は古くから水運による物資の集散地として重要な役割をはたしていたが、江戸時代になると鳥取藩はここに灘御蔵を設置し、上米の津出しが行われた。

港には御手船（千石船）が出入りし、船番所や役宅が設けられ、御蔵から北方の浜屋敷にかけての往来（本通り）には廻船問屋、米問屋、旅籠などが軒を並べ賑わっていた。藩倉を描いた絵図「文化五年橋津御蔵絵図」（鳥取県立博物館蔵）によると、当時、御蔵十四棟、計屋一棟が軒を連ねていた。そのうち古御蔵・三十間北蔵・片山蔵の三棟の御蔵が現在も姿をとどめていて、鳥取藩藩倉の歴史を物語る貴重な遺構である。

現存する古御蔵は平屋建の身舎に庇をつけた桁行十二間・梁間三間の長大な建物である。古御蔵はもと桁行十五間だったが、現在地に移築した時（大正十年）に桁行十二間に縮小されたと思われる。内部は四間ごとに板壁で区切られ三室に分かれている。この蔵は棟札が現存しており、大工棟梁・新蔵、大工・辰蔵により天保十四年（一八四三）五月に上棟したことがわかる。壁は小舞壁で、外部は大壁、内部は半間ごとに立つ柱や下げ竿を露出させている。屋根は疎垂木（そしたるき）の上に木羽を葺き、それを下地とする切妻棧瓦葺。鬼瓦には揚羽蝶紋（池田家紋）がかたどられ、

鳥取藩池田家の建物であることを強くアピールしている。三十間北蔵・片山蔵はいずれも桁行五間・梁間三間である。藩倉を取り巻く御土居（土手）が周辺に一部残り、また付近にはこの地方きつての豪商・中原家（天野屋）の住宅や土蔵も現存し、往時の面影を今に伝えている。

長瀬高浜遺跡

東伯郡羽合町長瀬
JR倉吉駅より車で十五分

弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、東郷湖の北西、天神川河口近くの砂丘地に立地する。昭和四十九年（一九七四）にはじめて遺跡が確認され、昭和五十二年（一九七七）より実施された発掘調査によって、一〇メートル以上堆積した白砂の下にある黒砂中より多くの遺構や遺物が発見された。

調査面積は約五万平方メートルにものぼり、竪穴式住居跡百七十四棟・掘立柱建物四十八棟・井戸跡六基などの生活遺構、そして土壙墓四十二基・古墳四十一基・石棺墓三十

基・木棺墓十四基・埴輪棺十三基などの埋葬遺構、弥生時代の玉作工房跡四棟、水田跡、畑跡などが確認された。また、大型高床建物、大型方形周溝遺構、形象埴輪群出土地なども発見されている。

この他にも大量の土器類や、埴輪類、金属製品などが多数出土した。弥生時代前期の管玉製作工程を示す玉作り関係資料や朝鮮系無文土器、小銅鐸や銅剣・銅釧・巴形銅器のほか、銅鏃・素文鏡などの青銅器がある。古墳時代前期の竪穴式住居跡からは鉄製農具や鉄製釣針が出土している。また、奈良時代から中世末にかけてのものは、和鏡や白磁が墓域周辺で発見されている。

家形・甲冑形・盾形・鞆形・蓋形の形象埴輪と多数の円筒埴輪が、砂丘地の一か所から集中して出土したことは特筆すべきことである。これらの埴輪は、本来古墳に立て並べべきものを何らかの事情で砂丘地に放置したものとみられる。鬼気迫る造形意匠と丹塗りされた埴輪群は葬送儀礼の祭具にふさわしく、なかでも甲冑形埴輪はほぼ実物大で重量感ある迫力の逸品である。実物の埴輪を使って古墳祭儀の実相を復元で

きるのは遺存状況が良く、器種がそろっている長瀬高浜遺跡の埴輪をおいて全国にも他になく、しかも、埴輪祭儀の古段階を示す埴輪群としても貴重であり、昭和六十一年（一九八六）に重要文化財に指定されている。

これらの遺構の調査や遺物の出土により遺跡の変遷が明らかとなった。弥生時代前期には管玉製作を中心とした玉作工房が営まれ、中期になると墓域を形成し、古墳時代前期から中期かけてはふたたび大きな集落がつくられる。この時期に、北東二キロの馬ノ山に四号墳をはじめとする橋津古墳群がつくられていることから、この古墳群を支えた人たちの集落であった可能性も考えられる。

古墳時代中期から後期には、集落が他に移動し、古墳が造営されるようになる。その後、奈良時代から中



世末まで墓域として利用され、江戸時代初期ころに飛砂によって一〇メートルもの白砂が堆積し埋没したものと思われる。

砂に埋もれた遺跡として全国的に注目された長瀬高浜遺跡であったが、終末下水道処理場建設のため、現場での記録を終えたのち消滅した。遺跡中最大の古墳で葺石をもつ一号墳は、遺跡近くに移築復元してある。出土品は、羽合町歴史民俗資料館に保管され一部が公開されている。

羽合町歴史民俗資料館

東伯郡羽合町久留
J R 倉吉駅よりバス十三分 羽合町役場前下車すぐ

砂地に埋もれた遺跡として全国的にも有名な羽合町長瀬高浜遺跡の調査を契機に、出土品の公開を目的として、昭和五十九年（一九八四）に開館した。

資料館外観は、長瀬高浜遺跡で出土した古墳時代の家形埴輪をモチーフとした造りになっている。展示室は二つあり、一つは国指定重要文化財の長瀬高浜遺跡出土埴輪を、もう一つは、国史跡橋津古墳群の出土品をはじめ、町内の遺跡から発見された土器や石器を展示している。

重要文化財指定の埴輪のうち三十

九個体は、ほぼ完全な姿に復原されており、そのうち家形埴輪・甲冑形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・円筒形埴輪・朝顔形埴輪が出土状況の写真パネルとともに常設展示されている。

開館時間 午前九時～午後四時三〇分
まで
休館日 月曜日・祝日・年末年始
問合せ先 ☎ 0858・35・3111

田後神社

東伯郡羽合町田後
J R 倉吉駅よりバス十一分 田後下車、徒歩十五分

田後神社は、宝徳二年（一四五〇）、出雲国八重垣神社（現松江市）の分霊を、大ぼん（現北条町江北）に勧請したことに始まる。その後、天神



川の川筋替えの時、現在地に遷座された。祭神は建速須佐之男命である。宝徳時代（一四四九～一四五二）に勧請され、牛頭天王を祀ったことから、近世には「大宝（法）天王」とも呼ばれた。

旧暦十一月一日に、新穀を供え豊作を祈願する霜月祭お供え祭とも）という宮座形式の神事が行われる。

田後神社頭屋祭「宮の飯」

東伯郡羽合町田後
J R 倉吉駅よりバス十一分、田後下車、徒歩十五分

羽合町田後の田後神社では、毎年旧暦の十一月朔日に「頭人」と呼ばれる五人の男性が「宮の飯」と呼ばれる神饌（神に捧げる特別な供物）をお供えし、一年の収穫を感謝する祭礼が行われる。

五人の頭人は、前日海に入り身を清め、海砂とホンダワラを一握りずつ持ち帰り、砂は境内などに敷き、ホンダワラは神前に供える。供えられたホンダワラの実の多い少ないで翌年の稲作の豊凶が占われた。当日は早朝から頭人頭の家で五升五合の玄米を臼でついて炊き、生の大根や炒った大豆などを混ぜ合わせた。これは「宮の飯」とか「御供」といわれ、後に氏子に分け与えられた。

この祭は、宝徳二年（一四五〇）に出雲の八重垣神社をこの地へ勧請（かんじよう）してから、五百年以上続けられているといわれる。室町時代の神祭の形式を伝える祭として重要である。

昭和六十一年（一九八六）に、県の無形民俗文化財に指定されている。

泊村

称名寺

東伯郡泊村泊
J R泊駅より徒歩一〇分

地蔵山清雲院称名寺は、浄土宗知恩院の末寺で心宗和尚によって開かれたという。本尊は恵心僧都作と伝える阿弥陀如来だったが、火災により焼失した。現在は、文政七年（一八二四）に、賀露（現鳥取市）の信者より寄進された湛慶作と伝える阿弥陀如来像が本尊となっている。

『蓮門精舎旧詞』によると、室町時代、地蔵菩薩が当村の浜に漂着し、これを安置する堂を建立したことがこの寺の始まりといわれる。『泊村の歴史稿』には、山号を地蔵山というのも、村人の夢枕に、「弘法大師作の元大山寺の地蔵尊が海底に沈んでいるので引揚げるように」とのお告げがあったからと記されている。この木像地蔵像は、村の文化財として泊地蔵堂に安置されている。

戦国期、寺は荒廃したが、本尊は河口城主・山名氏が城内で祀り、打吹城主・山名氏の家臣が寺を再建した際に戻された。また、この寺を称

名寺とした。その後再び荒廃したが、寛文六年（一六六六）に再々興された。その後もたびたび火災に遭ったが、信者の熱意によって建立された。

泊村歴史民俗資料館

東伯郡泊村泊
J R泊駅より徒歩十五分

「村の歴史を知るために、村の歴史を伝えるために」ということを目的に、村内から農具、漁具、生活用具、民具などが収集され、昭和四十八年（一九七三）四月に旧泊中学校特別教室を使って開設された。さまざまな道具や生活用品を通して、当時の生活や気候などを知ることができる。

現在の建物は、昭和五十三年（一九七八）十二月に新築されたものである。

開館時間 午前九時～午後四時

休館日 年末年始

問合せ先 ☎0858・34・3226

泊村グラウンドゴルフのふる里公園 潮風の丘とまり

東伯郡泊村泊
J R泊駅より車で一〇分

遠くに大山を望み日本海を見下ろす高台に、平成五年（一九九三）八月に開設された。

グラウンドゴルフは昭和五十七年

（一九八二）に泊村で考案されたスポーツであり、公園内には緑豊かな十六ホールのグラウンドゴルフ専用コースが広がる。そのほかにも巨大恐竜を配した探検の森、延長三四〇メートルのスパースライダーなどの遊具施設がある。

利用時間 午前八時十五分～午後五時

休園日 十二月三十一日、一月一日

問合せ先 ☎0858・34・3217



泊港

東伯郡泊村泊
J R泊駅より車で五分

国道九号から分かれて泊港の町並みに入ると、漁港特有の密集した家々が続く。視界の開けたところが

東郷町

東郷湖(池)

東伯郡東郷町・羽合町



する漁であり、今はめつたに見られなくなった。村内には泊村歴史民俗資料館があり、当時の漁具が収集されている。なお、石脇地区は鳴き砂の浜で有名であり、夏は海水浴と海岸キャンプでにぎわう。

亀甲山には展望施設やグラウンドゴルフ専用コースのある「潮風の丘とまり」があり、グラウンドゴルフの発祥地(昭和五十七年泊村の考案)として専用コースが設けられている。山頂からは眼下に泊港から日本海を一望することができ、夕日がすばらしい。

泊漁港である。東に亀甲山(標高八七メートル)があり、山を背に、西北向けに防潮堤で囲まれた入り江である。湾の中程の突堤から右手が元の泊湊、左手は昭和六〇年代以後の新港である。灘郷神社の下には、湾内に溜まる砂を排出するため江戸時代に造られた道流堤が残る。突堤はいずれも大正時代から築造されたもので、北防波堤、嶋堤、南防波堤など当時の呼び方が今に伝わる。

現在、小型底引き船によるカレイ漁が盛んである。また、ブリ、アジ、マダイを目的にした刺し網漁や沿岸イカ釣漁が行われている。昭和五十六年(一九八一)には、採るだけの漁業から育てる漁業への転換を図る「鳥取県栽培漁業センター」が誘致され、石脇漁港に設置された。

港のある泊地区を挟んで、東の石脇漁港から小浜漁港は一里浜、西の宇谷地区までは八町浜と呼ばれる。昭和三十年代までは、この浜一帯で伝馬船による「地引き網」が行われ、ハマチやサバ、さらにイワシなどの大漁を見た。また、沖合では孟宗竹を使ってシイラを寄せる「しいら漬け漁」も盛んだった。このような漁法は、江戸時代から山陰海岸を代表

東伯郡東郷町と羽合町にまたがり、周囲約一〇キロメートル、面積約四〇八ヘクタールで、県内では湖山地に次いで大きい。湖底は低平で、水深は最深部で四・六メートル、概ね二・五メートル以下と浅い。

東郷池は、かつて日本海の入江であったが、北条砂丘の形成と天神川からの土砂の埋め立てによって海から切り離され、潟湖として残され

たものである。南半部から塩見川、羽衣石川、東郷川、舎人川が流入し、北西部から橋津川が流出して日本海に注いでいる。西側と南東側にはそれぞれ浅津、松崎の低湿地が広がるが、北東部では御冠山が張り出し、北岸には馬ノ山の丘陵が、南部には鉢伏山から延びてきた低い尾根がせまっている。御冠山の張り出しと、浅津の低地が西から湖中に突き出ているため、池の形は中央部がくびれた瓢箪型を呈する。この形が翼を広げた鶴に見えることから、鶴の池とも呼ばれている。

湖底や湖岸から温泉が湧出し、松崎には東郷温泉が、浅津には羽合温泉がある。池一帯は羽合海岸と共に東郷羽合臨海公園に指定され、池を一周する道路や周囲の湖岸に各種のスポーツ施設、広場などが整備されている。三朝東郷湖県立自然公園の中核をなす池でもある。

東郷湖羽合臨海公園

東伯郡東郷町藤津(事務所)
JR松崎駅より徒歩十五分

東郷湖周辺に広がる約五一ヘクタールが三つの機能をもった公園として整備されている。

東郷町・羽合町にある「スポー

ツ・レクリエーションゾーン」には、ゲートボール場、テニスコート、スポーツセンター、リハビリスポーツ広場などがある。東郷町の湖畔には、国内最大級の中国庭園である「燕趙園」やクアハウス「龍鳳閣」などを含む「観光ゾーン」があり、ハワイ海岸には、海水浴をはじめサーフィンをやジエトスキーなどマリンスポーツが楽しめる「海浜ゾーン」がある。

問合せ先 ☎0858・32・2189

伯耆国

東郷庄下地中分絵図

「伯耆国東郷庄下地中分絵図」は、鎌倉時代・中期の正嘉二年（一二三八）十一月に作成された絵図である。地理歴史用「日本史」の教科書に、その部分図が紹介されており、著名な荘園絵図として知られている。

東郷庄として描かれている範囲は、東郷池を中心に橋津、馬野、伯井田、小垣、倉淵・耳江、長和田、東は野方、笏賀、西は北条郷、西郷、南は三朝町、竹田郷の地名がみえ、北は日本海に臨んでいる。

鎌倉中期から後期にかけて各地で荘園領主側と地頭とで荘園の利権をめぐる抗争が多発した。

東郷庄では、領家は京都の松尾神社と地頭の間での中分が複雑であった。地頭は東、荘園領主が西というように明確に区分できたり、自然地形（川山）、指標物によって境が理解できる場合には、絵図の必要はない。

伯井田、橋津など中分の取り決めが複雑であり、一宮領、地頭領、荘園領主（松尾神社）と三者の所領を明確に表現するのは困難であった。

また、この地が港湾や水上、陸上交通の要路にあたっており、幕府にとつても、重要な地域であった。将来に渡って、相論が起きないように、権益を明示する必要があり、正確な絵図として作成されたと思われる。

東郷庄の下地中分当時の地頭は、筑前から移住した原田一族が伯耆国に土着し、東郷氏と称して地頭に任ぜられたという説があるが、明らかでない。東郷庄の西に隣接する北条郷では、北条重時が地頭職にあり、建長元年（一二四九）には、庄四郎なる人物が地頭代に任ぜられている。北条氏は、鎌倉時代の後期にかけて交通の要衝に所領の拡大をはかっていた。

中世の交通路を考えると北条河（天神川）は日本海から、伯耆国府

までを結び重要な水上ルートに相当していた。

絵図には、神社や人家も描かれており、当時の状況がよくわかる。また、絵図に描かれた北条河は、橋津川に合流して海へ流れ込んでいるが、現在では流路が変えられ（江戸時代はじめての鳥取藩の工事による）、北条町の江北浜から海に流入している。したがって、絵図にみえる北条河の流路は、羽合町長瀬の東南方、羽合町役場前を通る国道九号付近が想定され、現在の船川に往時の様子をしのぶことができる。

温泉

東伯郡東郷町松崎
JR松崎駅よりすぐ

東郷湖南岸に湧出する温泉。江戸時代から湖中に温泉が湧き出ることが知られていた。天保十四年（一八四三）、地元の人たちが温泉利用を藩へ願い出たのが東郷温泉の始まりである。

東郷湖岸には、かつて龍湯島と呼ばれる島があり、明治時代には湧出する湯を用いた温泉施設があったが今はない。

明治五年（一八七二）、倉吉の豪農・山柘氏が旧引地村内の湖畔を掘

削し掘り当てたのが「明五の湯」である。その後、源泉を開発して別荘とし、さらに改築し明治十七年（一八八四）に温泉旅館「養生館」とした。その後、山陰線（現山陰本線）の開通に伴い、大正末期から新たな源泉開発も試みられ、松崎駅周辺にも温泉場が増え三朝温泉に次ぐ温泉地として名をなした。当時、松崎温泉と呼ばれていたが、昭和二十八年（一九五三）の東郷町誕生によって、名称は東郷温泉に統一された。

現在、五十一の源泉があり、うち十七井が利用され集中管理されている。平均温度は七十二・四度、湧出量は毎分一、二六二リットルである。



主たる泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物、硫酸塩泉である。胃腸病、リウマチ、神経痛によいといわれる。

温泉の地下の基盤は花崗岩で、JR松崎駅付近では、地下二二〇〜二七〇メートル辺りにこの基盤に爆裂口のような形状で径三五〇メートルのほぼ円筒状のくぼみがある。そこには第三系の火山岩が凹部を埋めて厚く堆積している。温泉はこれらに発達する割れ目から湧出すると考えられる。

三朝東郷湖県立公園内に位置し、中国庭園燕趙園にも近い。毎年、七月十九日、二十日には「水郷祭」でにぎわう。

燕趙園

東伯郡東郷町引地
JR松崎駅より徒歩一〇分

鳥取県と中国河北省の友好のシンボルとして、東郷湖畔に開設した。中国の歴代皇帝が造って楽しんだという皇家園林方式の庭園である。

この庭園は、建設、素材の調達、加工など、全ての作業が中国で行われた。現地で作られたあと解体して日本に運ばれ、中国人技術者のもと、再度建設されたものである。

庭園内はボタンや蓮など四季折々美しい花に彩られる。平成十一年（一九九九）には、イベント会場である集粹館も設置された。

開館時間 午前九時〜午後五時
休館日 第四火曜日

祝日の場合は翌日
問合せ先 ☎0858・32・2180



ゆアシス東郷「龍鳳閣」

東伯郡東郷町引地
JR松崎駅より徒歩一〇分

東郷湖畔に建つ龍鳳閣は、隣接する中国庭園「燕趙園」とマッチした中国風の建物となっている。

館内には、「寝湯」「運動浴」などいろいろなタイプの入浴方法を楽しむことができるほか、東郷湖を一望できる露天風呂もある。

また、プールやトレーニングルームなども設けられていて、多様な目的に合わせて利用できる。

開館時間 午前一〇時〜午後九時
休館日 第四火曜日（祝日の場合は翌日）、十二月三十一日

問合せ先 ☎0858・32・2622

大伝寺

東伯郡東郷町引地
JR松崎駅より徒歩約十五分

大伝寺は、山号を九品山といい、曹洞宗に属する。九品堂とも呼ばれた。本尊は十一面観音と阿弥陀如来である。

万寿元年（一〇二四）に開かれたといわれ、大和当麻寺（現奈良県当麻町）で行われる練供養（浄土来迎会）の儀式で、中将姫の遺跡を移したと伝えられている。この寺の地名が「引地」というのもそれに由来するといわれる。

その後、寺は衰退し廃寺同然になったが、応安四年（一三七一）、羽衣石城主、南条貞宗によって再興された。その後、幾度も災火に遭ったが、その都度再興された。慶長十年（一六〇五）の再興の際は、二十

五菩薩の面を新調し、昔ながらの練供養を行なったと伝えられている。

現本堂は、明治十年（一八七七）に倉吉行蔵院を買い、移築したものである。阿弥陀堂には中将姫像と阿弥陀二十五菩薩像が祀られている。

旧暦三月十四日暮れから十五日にかけて九品山会式が行われ、遠近の信者の参拜でにぎわう。十五日午後は流灌頂の供養に続き、中将姫の練供養が行われる。

寺の前にある堀は、正嘉二年（一二五八）の東郷庄下地中分に際して、中分線として掘られたものであるとの説もある。

九品ばやし・九品山会式

九品山とは、東郷町引地の曹洞宗寺院、九品山大伝寺の春の祭礼のことである。会式（祭日）は、旧暦三月十五日、本寺に祀る中将姫の命日に行われる。この日は、中将姫の尊像が厨子から公開されるほか、先祖供養と塔婆や位牌を焼いて供養する流灌頂が行われ参詣者で賑わう。かつては、中将姫を輿に載せ、阿弥陀堂の二十五菩薩に引き合わせる来迎会も行われ、県中部では、春の

三大祭り（他は三徳山と伯耆一宮）に数えられていたが、現在では、先祖供養を中心とした参詣となっている。

倭文神社

東伯郡東郷町宮内
JR松崎駅よりバス五分 藤津下車
徒歩三分

建葉槌命・下照姫命などを祭神とし安産の神としても知られる。この地方は、昔、織物を生業とする倭文族が多数居住したことから、織物の祖神といわれる建葉槌命を祀るため、創建されたものと考えられる。近くの東郷湖はまだ入海の時代で、現在湖畔にある藤津とか浅津と呼ばれる部落名は、古代織物の原料であったフジズルやアサに由来するともいわれている。

その後、農耕を生活の手段とした出雲族が移住し、大國主命の娘神である下照姫命も海路、宇谷と宇野の間にある仮ガ屋崎に着かれ、ここに居住され安産の普及に努めた。境内には安産岩と呼ばれる岩が参道横にある。また付近には御船岩・御腰掛岩などが残っている。他の神々も皆、大國主命の子神が関係の深い神々で、先住の倭文部と合流、生活し、後に祭神となった。

平安期に入ると、この地方も山岳



仏教が隆盛を極め、神仏習合説は各地に神宮寺の創建を促したため、大なる社寺がこの付近にも伽藍を競うようになった。そのほとんどが天台宗に属していたという。この頃から当社は一ノ宮倭文大明神と呼ばれるようになった。当時の社殿は、大永年間（一五二一〜一五二八）の戦乱によって荒廃したが、天文年間（一五三二〜一五五五）に尼子晴久が社殿を造営した。

天正年間（一五七三〜一五九二）には中国征伐の羽柴（豊臣）秀吉を迎え打つため、吉川元春は御冠山に陣取り、当社の神官や僧侶を追放して兵営としたが、霊夢を感じ神威を

恐れて馬ノ山に引き上げた。その後、秀吉と元春は戦わず軍を引いている。その後も火事などにより消失・損壊を受けるたび、再建されている。現在の社殿は文化十五年（一八一六）に伯耆国内に義金を募り完成したものである。

大正四年（一九一五）、当社所有の山林の丘に下照姫の御墓と称する、土まんじゅうの形をした古墳からおびただしい埋葬品が発掘され、国宝に指定された。

毎年五月一日に行われる祭礼は、多くの人で賑わう。

浪人踊り

東伯郡東郷町松崎

当地に伝わる盆踊りで毎年七月二十日に開催される東郷湖の水郷祭でも披露される。

踊りの起源譚は、南条氏の遺臣の供養踊りとされている。東郷湖畔の羽衣石城は、天下分け目の関ヶ原の合戦の折に落城し、生き残った南条氏の兵士は浪人となって全国に散らばった。翌年から、盂蘭盆の夜になると浪人たちが集まり、城跡を見上げながら供養のために踊り、夜明けとともに去っていったという。

念仏踊りの形式を伝え単調な踊りである。音頭取りの七七五調の哀調に富む口説きにあわせ、編み笠に黒装束の踊り手が、手をゆらゆら動かしながら踊る。拍子をとるところも音を立てず合掌するなど、鎮魂供養にふさわしい静かな踊りである。

史跡 伯耆一宮経塚

東伯郡東郷町宮内
JR松崎駅より車で
一分

平安時代後期の経塚。東郷湖東岸に位置する伯耆一宮倭文神社境内の東南側丘陵上にある。経塚は、一般に経典を地下に埋納した遺構で塚状に造られる。

伯耆一宮経塚は、直径一六メートル、高さ一・六メートルの円墳状で、深さ二メートル余りの所に長さ一・二メートル、幅〇・九メートルの石槨が存在していた。石槨内には、経典を納めた経筒や仏像、短刀があり、その周囲に多くの供養品が置かれていたという。

銅製経筒一口、金銅観音菩薩立像一躯、銅造千手観音菩薩立像一躯、銅板線刻弥勒立像一面、草花蝶鳥六稜鏡一面、素文鏡一面、檜扇残片、

短刀、刀子残欠、ガラス玉、銅銭二枚、漆器残片が出土した。

経筒は、総高四二センチで円筒形の筒身全体に埋納の趣旨が二百三十六文字にわたって刻まれている。「釈迦入滅後二千二十五年にあたる康和五年（一一〇三）十月三日に僧京尊が倭文神社の御前で如法経一部八巻を供養し、地中に埋納する」といった内容を記す。白鳳期に作られた金銅観音菩薩立像は、総高一・五センチの細身の直立像で右手先が欠失している。銅造千手観音菩薩立像は、総高一・六センチと小振りです。平安時代の特徴を備えており、寄木造の手法を取り入れている。銅板線刻弥勒立像は、高さ一一・三センチ。舟形光背状の銅板に蓮華座上に直立する弥勒立像を毛彫りで描き、背面には「弥勒如来」と刻まれている。本経塚は、造営時期が明らかで埋納品も多数にのぼることから経塚の実相を示す貴重な資料であるとして、出土品すべてが昭和二十八年（一九五三）に国宝に、昭和十年（一九三五）には国の史跡に指定されている。

史跡 北山古墳

東伯郡東郷町長和田・野花
JR松崎駅より車で五分

鳥取県のほぼ中央、周囲約一二キロの東郷湖の南岸、東郷町長和田・野花にある前方後円墳。丘陵の先端付近の尾根上に位置し、全長約一〇メートル、後円部径約七メートル、高さ一一メートルあり、山陰地方最大規模の前方後円墳である。古墳時代中期初め頃の造営と推定される。後円部側を湖に向け、前方部はなだらかに連なる丘陵を幅約一〇メートルにわたって丘尾を切断し形づくっている。墳丘には、人頭大の川原石が散乱しており葺石があったことがわかる。

後円部中央は、大きく盗掘されていたが、昭和四十一年（一九六六）の発掘調査により、遺骸を納めた埋葬施設二基が確認された。一つは埋葬施設の床面だけが遺存していたもので、長さ六・二メートル・幅四・三メートルの範囲に円礫を敷き詰めており、排水のための溝が前方部に向かって長さ二メートル確認された。近くに散乱する石材から板石を積み上げた竪穴式石室であったと推定されている。もう一つは、長さ約

一・五メートル、幅〇・五メートルの箱式石棺である。石棺内からは、人骨とともに中国製とみられる龍虎鏡や鉄刀・鉄斧・ヒスイ製勾玉・碧玉製管玉など多数の副葬品が出土している。また、墳丘各所からは、古墳時代中期前葉に位置付けられる円筒埴輪や、家、短甲、ニワトリなどの形象埴輪が多数出土している。

具と見られる壺、中国産の青磁器など出土している。室町時代の南条氏は伯耆国守護代として知られている。永禄期、尼子氏にかわって戦国大名毛利氏勢力が伯耆に及ぶとこれに従い、伯耆国三郡、河村、久米、八橋を支配した。豊臣政権下でも東三郡（東郷町・倉吉市・東伯町）を領有している。慶長四年（一五九九）の諸侯分限帳に六万石と見える。元統の子・元忠は関ヶ原の合戦で西軍に参加したため改易となり、羽衣石城は廢城となった。

羽衣石城跡

東伯郡東郷町羽衣石
JR松崎駅より車で二十五分

山陰地方における古墳時代中期を代表する古墳として重要であり、昭和五十五年（一九八〇）、国の史跡に指定された。

『陰徳太平記』に羽衣石の名称について、南条氏の家城の山を崩れ岩といたったが、南条宗勝の父・紀伊守が羽衣石山と改めた、と記している。この中で、南条氏の祖が狩りの帰り道に出会った「天上の仙女」の話を紹介している。羽衣伝説は各地に伝えられているが、山上に大岩群のあるこの山にも、羽衣伝説が伝えられていたのであろう。

南条氏の始祖は出雲国守護・塩治高貞の息子で、南条伯耆守貞宗と伝えられている。貞宗は貞治五年（一一三六）羽衣城を築いた。倉吉駅と松崎駅のほぼ中間に位置する長和田から溪流に沿って、約四キロメートル上り、谷川の行き詰まった所に羽衣石の集落がある。ここから山道に入り登った頂上に羽衣石城があり、前面に東郷湖を見おろす。

現在では、山頂に模擬天守閣が改築されている（平成二年の建築）。翌年の調査によれば、備前焼、地鎮

三朝東郷湖 県立公園

倉吉市・東伯郡三朝町・東郷町・羽合町

日本海を望み、湖と温泉と史跡に恵まれた県立自然公園である。倉吉



市・東伯郡三朝町、東郷町、羽合町の四市町にまたがる。総面積は一万五千六十七ヘクタール。

そのなかには三徳山^{みとくさん}二帯をはじめ自然保護の特別地域が六六一ヘクタールある。この特別地域は昭和二十九年（一九五四）に指定され、その後、昭和三十九年（一九六四）に拡張されて現在の規模となった。

夕日の美しい東郷湖を中心に、三朝、東郷、羽合の三つの温泉地がある。国宝投入堂^{なまけいれいどう}のある三徳山^{さんとくさん}三仏寺、城跡公園の打吹山^{うたふきやま}、新緑と紅葉に彩られる溪谷美の小鹿溪^{おしかい}、ブナ林のみられる佐谷峠^{さたにがせ}と変化に富む。公園の範囲は、東は青谷町に接し、西は東

伯町を境とし、南は岡山県境に至る。

中国山地の脊梁部から流れる小鹿川、三徳川が合わさって天神川に注ぐ。天神川は北に流れて広い沖積平野をつくっている。上流では小鹿溪にみるように深い溪谷となるが、山上はなだらかで高清水高原のような準平原が広がる。その間に、木地山、鉛山、神倉など魅力的な山村が散在する。小鹿川の最上流部にある中津集落は、平家の落人伝説で有名である。平野部にも見所が多い。橋津古墳群は、一帯が公園化され、眼下には北条砂丘、さらに日本海から大山の展望がすばらしい。東郷湖の北東には、伯耆一宮として歴史のある倭文神社^{しとり}が控える。南には、日本史の教科書に欠かせない中世の荘園争いを今に伝える絵図「東郷庄下地中分絵図」で著名な農地が広がっている。さらに、戦国の尼子・毛利合戦の舞台ともなった羽衣石城跡^{あし}も近い。丘陵地は二十世紀梨の産地であり、東郷町の梨の評価は特に高い。梨畑を歩く、白鳳時代の寺院跡を示す塔礎石に出会う。

昭和四十七年（一九七二）に都市公園として東郷湖羽合臨海公園が指定され、浅津地区を中心に東郷湖の

湖岸あるいは海浜地域に、スポーツ公園や海浜施設の整備が進められた。温泉に、スポーツに、汗を流す行動的な観光レクリエーションも可能な地域である。

御冠山

東伯郡羽合町・東郷町・泊村

県中部、東郷湖の北東部に位置し、東伯郡東郷町、羽合町、泊村にまたがる標高一八六メートルの山。御冠山という山名は、山体が丸くドーム状を呈し、帽子のように見えることから付けられた。

鮮新世三朝層群の御冠山安山岩類と呼ばれる、シソ輝石と角閃石を斑晶としてもつ安山岩の溶岩で構成される。この溶岩は山頂を中心に、東と南は舎人川^{とねり}まで、北は日本海岸まで分布し、南西部では山麓が東郷湖に大きく張り出している。御冠山安山岩類の下には、やはり三朝層群に属する鉢伏山^{はちふせ}板状安山岩という別の溶岩があり、西に隣接する馬ノ山^{うまのやま}（一〇六メートル）はこの溶岩でつくられている。

山頂西の山麓には伯耆一宮の倭文神社^{しとり}があり、その南に位置する国指定史跡の伯耆一宮経塚からは、菩薩

像などとともに康和五年（一一〇三）に築かれたことを示す銘文の書かれた経筒が出土し、いずれも国宝に指定されている。

御冠山一帯は三朝東郷湖県立自然公園の一部に含まれ、山麓は東郷産として特に人気の高い二十世紀梨の産地である。

鉢伏山

JR青谷駅から車で三〇分、松崎駅から車で二〇分

東伯郡東郷町と気高郡青谷町にまたがる標高五一一・九メートルの山。山体の基盤は花崗岩で、その上を新生代第三紀鮮新世の火山活動で形成された安山岩が覆つ。安山岩の層厚は約二五〇メートルに達する。この安山岩のもととなった溶岩流はなだらかな台地状地形をつくり、山頂から北方にかけて分布して、鉢を伏せた山容を形成している。安山岩は板状の節理がよく発達し、鉢伏山板状安山岩と呼ばれる。

鉢伏山北麓に源を発する舎人川^{とねり}の上流には、落差四四メートルの今滝があり、西側にある支流漆原川には不動滝（落差三二メートル）がある。また、東側に位置する気高郡青谷町田原谷にも同名の不動滝（落差約二

〇メートル)がある。これらの滝は、鉢伏山塊が沖積地と接するところに共通して位置している。今滝では、流水により、基盤の花崗岩が浸食を受け、上層にある安山岩が支えを失って崩壊し、急な崖となって滝が形成されている様子を観察することができる。

鉢伏山は、昭和二十九年(一九五四)に三朝東郷湖県立公園の一部に指定された。登山路が整備され、展望台のある山頂からは、東郷湖や日本海を一望できる絶景地となっている。

三朝町

温泉 三朝温泉

東伯郡三朝町三朝・山田
JR倉吉駅よりバス(〇分)
三朝温泉下車すぐ

山間のかじか鳴く三徳川に沿って温泉が湧出している。現在二十九件の旅館があり、三千八百人の収容力を誇る。年間百五十万人を超える観光客を迎える、鳥取県を代表する温泉地である。

各旅館にある内湯は趣向を凝らした個性的なものが多い。また、外湯もおもしろく、三朝橋から見下ろす河原には「河原露天風呂」があり、せせらぎを聞きながら入浴することができる。屋内には「菩薩の湯」「株湯」などがある。

三朝の湯(湯村の湯)は長寛二年(一一六四)、大久保左馬之助によって発見されたといわれ、山田の湯は宝暦元年(一七五一)の開湯といわれる。宝暦の頃には二十三か所の湯壺があり、三徳山参詣客や湯治客で賑わった。大正時代にラジウムが見られ、本格的に温泉旅館が建ち並び始めた。大正三年(一九一四)三朝温泉のラジウムはラドン含有量が



世界的にもトップクラスであることが発表され、「ラジウム温泉三朝」として一躍有名となった。

現在、九十四の源泉のうち六十八が利用されている。そのうち二十七が自噴泉である。平均温度は五十二・八度、湧出量は毎分一、九一三リットルである。神経痛、リウマチ、痛風に効能があるとされている。三朝温泉の湯は、温泉療法にも活用されている。

花崗岩の割れ目を上昇してきた温泉は地下水によって拡散を止められ、加圧されて自噴している。河原露天風呂の上流に設けられた堤防は表流水をダム・アップして温泉の量

と水温を高めるためのものである。

三徳川に沿って旅館街の町並みが続く。三朝橋を中心に下流のかじか橋、上流の恋谷橋はそれぞれに風情のある架橋で、ぶらりと散策するのも楽しい。また、温泉街には、空き店舗を利用した「湯の街ギャラリー」がある。藍染めを展示している「藍の館」、三朝温泉に古くから伝わる伝統行事である「陣所」を紹介した「陣所の館」、かじか蛙の「カエル人形館」、地元の調理師が高野豆腐を素材に製作した作品を展示する「調刻の館」、宮沢賢治の「カンパネラの館」などがある。

三朝東郷湖県立公園内であり、近くには三徳山三仏寺や小鹿溪などがある。

三朝温泉の文学・人物

独特の文化的風土を持つ三朝温泉には、湯けむりに誘われるように、多くの文学者が訪れ、魅せられている。「仕事をへつかれたはる百姓とあたまをならべ外湯に入るも」

三朝大橋の南詰めには、こう刻まれた木下利玄(一八八六―一九二五)の歌碑が立っている。利玄は大正五

年（一九一六）九月に、三朝温泉に泊まっている。歌碑は昭和五十六年（一九八一）に建立された。

「泣いて別れりや空までくもる

くもりや三朝がよ雨となる」

三朝大橋南側から上流のふるさと健康むらに向かう道の中程には、野口雨情（一八八二―一九四五）の民謡碑が立つ。これは「三朝小唄」の一節である。雨情は昭和二年（一九二七）八月に入湯している。碑は昭和二十八年（一九五三）に建立された。

与謝野寛（一八七三―一九三

五）・晶子（一八七八―一九四二）

夫妻は、昭和五年（一九三〇）に三朝温泉を訪れている。昭和五十六年にはかじか橋の南詰め口に歌碑が建てられた。

「水と灯の作る夜色のめでたきを

見んと都と溪あひの湯場」

晶子

「三朝湯の

ゆたかなるかなこころさへ

この新しく湧くよ学ばん」

寛

「川波が雨の裾をば白くする
三朝の橋をこへて来しかな」

晶子

斎藤茂吉（一八八二―一九五三）

は、昭和九年（一九三四）五月に三朝を訪れた。みささ美術館入口には、昭和五十六年に建立された歌碑が立っている。

「したしさはうす紅の合歡の花

むらがり匂ふ旅のやどりに」

「湯は流れ釣人もいて水流れ」

荻原井泉水（一八八四―一九七六）

の句碑は木屋旅館前に建っている。荻原は、大正十五年（一九二六）以来、数度三朝に来ている。昭和四十七年（一九七二）六月には、句碑の除幕をかねた「層雲春季大会」が開かれた。

三朝温泉とキュリー夫人

三朝川の上流に開ける温泉郷・三朝温泉は長寛二年（一一六四）に白狼を助けた武士が霊夢に導かれて発見したといわれる。昭和三年（一九二八）、その白狼の碑が建立された。また、三朝大橋南詰めには、昭

和六十三年（一九八八）に建立された白狼とそれを救けた大久保左馬之祐のブロンズ像がある。

三朝温泉はラジウムの温泉として知られる。このためラジウムを発見したキュリー夫人へ感謝の気持ちを含め、昭和三十四年（一九五九）、温泉会館前（現プランナールみささ前）に夫人の胸像を建立した。



旅館大橋
東伯郡三朝町三朝
JR倉吉駅よりバス二〇分、三朝温泉下車すぐ

旅館大橋は、昭和六年（一九三一）に完成した木造二階建一部三階の近代和風建築である。大工棟梁は後藤鉄一郎。三朝の町をゆるやかに流れる三徳川と街道に挟まれた縦長の敷地に入母屋造の建物が幾重にも重なって独特な屋並みを見せている。切

妻破風の屋根を乗せる玄関車寄せを入り、肥松の上がり框で靴を脱ぎ、ロビーに座すと三朝川のせせらぎが聞こえ、深緑の森に心がなごむ。二階にある百畳の大広間は本格的な書院造で格天井は高く、付書院・床・違い棚が一列に並び、反対側に舞台が設けてある。また大広間を覆う大屋根には千鳥破風が付いている。

客室は一つとして同じ間取りはなく、座敷飾りとなる床・棚・書院にそれぞれ工夫が見られ、中には船底天井の室もある。天井や床柱など、各客室ごとに用いた材質も異なり、「南天の間」「檜の間」といった客室名もある。回廊を東に進むと数寄屋のたたずまいそのままに表わした茶室「洗心亭」（大西良慶和尚命名）がある。

なお、建物の西端には妙見山の神の使い・白狼が発見したと伝えられる上之湯、中之湯、下之湯の三つの温泉があり、「天然巖窟の湯」と称されている。平成九年（一九九七）九月に本館・離れが、十二月にその他の棟が国の登録文化財として登録された。

みささ美術館

東伯郡三朝町三朝
JR倉吉駅よりバス二〇分
徒歩一〇分

アジアの宗教と美術をテーマに、ガンダーラ如来像やアジア各国の神々の像や宗教にまつわるものが展示されている。

展示物の中には地元三徳山三仏寺に祀られている聖天と同型のものがある。

また、倉吉市在住の版画家・長谷川無弟（富三郎）氏の代表作をはじめ多数の作品が所蔵されている。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 火曜日・祝日の翌日

問合せ先 ☎0858・43・3111

陣所（大綱引）

き・ジンシヨ

三朝温泉街で端午の節句に行われる藤力ズラを使った綱引きである。かつては倉吉や関金でも行われていたという。

三朝の陣所は、県東部を中心に行われる菖蒲綱引きが明治初期に変化したものと考えられている。現在、五月になると地区の者は山から藤力ズラを切り出して川に浸け、一本の綱の長さ八十メートル、周囲一・五メートル、重さ二トンの雌雄の綱を



からむ。

綱引きは、五月四日の夜九時過ぎに、地区を上（東―雄綱）と下（西―雌綱）に分け、それに温泉客が加わって行われる。かつては、綱引きに勝った方が豊作だといわれていたが、現在では東が勝れば豊作、西が勝れば商売繁盛ということになっている。

昭和六十三年（一九八八）に、町の無形文化財に指定され、平成十一年（一九九九）には、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として選択された。

なお、日本海を隔てた大韓民国にも、材料は異なるが雌雄の縄を用いた同様の祭りが存在する。

陣所の館

東伯郡三朝町三朝
JR倉吉駅よりバス約二〇分
三朝温泉下車

「陣所」とは、三朝温泉で毎年五

月四日に行われる「大綱引き」のことで、藤力ズラをより合わせて、長さ八〇メートル、胴周りが最大二メートルもある巨大な雄綱・雌綱を作り、両綱を結合させて東西に分かれて引き合う伝統行事である。

三朝橋のたもとに建つ陣所の館には、「陣所」の一部をはじめ、行事の歴史や国内外の伝統的な綱引きが展示・紹介されている。

開館時間 午前一〇時三〇分～午後九時三〇分

休館日 木曜日

問合せ先 ☎0858・43・3712

道の駅「三朝・楽市楽座」

東伯郡三朝町大柿

国道一七九号は、倉吉市から三朝町を通り、人形峠を岡山県に越え、上斎原村から津山市へ向かう。国道の沿線、三朝温泉と人形峠の中間点にある。

特産品販売所「楽市楽座」、さらに隣接して木工センター「とちの木工房」がある。これらの施設は既に平成元年（一九八九）にオープンし、平成五年（一九九三）四月に道の駅の指定を受けた。

「楽市楽座」の名の通り、地元農

家が自由に出荷することができ、季節ごとの旬の食材が並び、隣には二十世紀梨とリンゴの樹園が育ち、農作業の体験やもぎ取りができる。春三月と秋十一月には「楽市祭り」でにぎわう。また、木工センターでは、製品の展示室があり、自由に木工作業を見学したり購入したりすることができる。

周囲は静かな里の風情があり、ドライブの合間の休息に格好の場所である。人形峠を越えると奥津温泉、国道四八二号をたどれば蒜山高原、大山あるいは湯原温泉に至る。岡山県境を挟んで、行くも帰るも立ち寄りやすい場所である。

ふるさと健康むら

東伯郡三朝町橋手
JR倉吉駅よりバス十五分
三朝温泉病院前下車、徒歩一〇分

三朝温泉の西側に平成四年（一九九二）にオープンした。広場やふるさと体験村からなる多目的施設。ふるさと体験村には、三朝町内外の特産品や工芸品が販売される物産館と織物や陶芸を体験することのできる工房がある。

開館時間 午前八時三〇分～午後五時
休館日 毎週火曜日（祝日の場合は翌日）

さいとりさし

さいとりさし(採鳥刺)は、鷹狩りの餌にする小鳥を採る者のことである。県外では化粧をした男の子が可愛らしく舞う芸能もあるが、本県の場合、大人が狂言風に踊る。天下御免の鑑札を持つさいとりさしが権力をかさに横暴をふるう様子を、皮肉って踊ったのが始まりとされる。鳥を採ることから転じて「嫁を取る」、「福を取る」と連想され祝福の芸能としても踊られた。

また、東伯郡三朝町湯谷・関金町大鳥居(昭和四十九年、県無形民俗



文化財に指定)、鳥取市覚寺(平成六年、鳥取市の無形民俗文化財に指定)などは古刹に近いことから、寺院の僧侶も風刺されている。温泉地に近いことで御座敷芸の一つとして発展した。



東伯郡三朝町東部、鹿野町との境付近に位置する標高八九九・七メートルの霊山。北と南をそれぞれ西に向かつて流れる三徳川と小鹿川に挟まれた山塊の中心にあり、山頂から東西に緩い傾斜の稜線が幅狭く延びる。稜線の山腹、とくに北面は開析が進み急峻な斜面に深い谷が形成されている。

山体は、鮮新世の三朝層群に含まれる三徳山安山岩類と呼ばれる溶岩と、その下層の中新世鳥取層群に属する安山岩質凝灰角礫岩で構成されている。北面の標高約五〇〇メートル地点にある国宝の投入堂は、凝灰角礫岩と溶岩との境界部にできた天然の窪みを利用して建立されており、凝灰角礫岩の急崖を足場として、お堂の上には柱状節理の発達した安山岩溶岩が覆いかぶさるように張り

出している。

北面の麓を流れる三徳川流域では、凝灰角礫岩に礫岩層や泥岩層・砂岩層が挟まれており、ここから広葉樹・針葉樹を含めた多様な植物化石が産出する。三徳型植物群と三朝成植物群が認められており、いずれも日本の後期中新世を代表する貴重な化石植物群となっている。

三徳山の麓の三仏寺から投入堂まで、途中鎖伝いの箇所もある急峻な登山道があり、これを登る参拝客や観光客も多い。

三徳山は、昭和九年(一九三四)に国の名勝及び史跡に指定されており、併せて今もなお自然が手つかずの状態で見守られている。三朝東郷湖県立自然公園に含まれる。



標高八九九・九メートルの三徳山にある天台宗の古刹である。麓に輪光、正善、皆成の三院、そして本堂の裏の宿入橋を渡ると、背後にそびえる輝石安山岩とその集塊岩の急な北斜面を利用して、文殊堂、地藏堂、納経堂、投入堂といった多数の国宝や重要文化財の建造物、鐘楼、

観音堂、元結掛堂、不動堂、十一面観音堂等が建てられている。

三仏寺の由緒は明確ではないが、寺伝によると、慶雲三年(七〇六)役小角が三弁の蓮花を散らしたところ、その一弁がここに落ちたので(ほかには伊予石槌山と吉野)堂宇を建てて修験の行場にしたといわれている。三徳山奥の院「投入堂」は役行者が法力で投入れたとされ、建立方法については、今もなお謎のままである。

平成十三年(二〇〇一)、奈良文化財研究所が行った年輪年代測定によつて、投入堂は平安時代後期(一〇八六―一一八四)に建てられ、納経堂も投入堂と同時期に建立されたことが判明した。

嘉祥二年(八四九)、慈覚大師によつて伽藍が建立され、阿弥陀・釈迦・大日の三尊を安置したので三仏寺といわれるようになったという。ただし、慈覚大師の来山は史実に明らかではない。

源頼朝、足利義満ともに同寺を尊崇し、盛時は三十八寺四十九院を数えたというが、兵火によりその多くを焼失した。

室町時代末には、近くの羽衣石城

の南条元統が崇敬し、天正五年（一五七七）に堂宇十八、坊十二を再興した。文殊堂の厨子の金物には、天正八年にこれらの金物を寄進した銘がのこっている。

寛永十年（一六三三）、因伯国主・池田光仲は寺領百石、山林境内東西五〇町、南北三〇町を寄付した。

現在の本道は、天保十年（一八三九）に池田齊訓が再建したものである。入口に古い石段が保存され、それに平行して新しい石段ができている。この旧石段の摩滅の著しさを見てもいかにその昔、参詣人が多かったかが想像される。

麓にある境内の宝物館には、源頼朝の奉納した太刀や納経堂で発見された古写経や銅鏡（旧国宝）、十一面観音などが所蔵されている。特に銅鏡は、直径二七・五センチの裏面にはオウムが花をくわえた模様を鑄出しており、表には胎蔵界の大日如来、菩薩等を針のごとく細かに彫刻した絵があり非常に美しい。十一面観音（旧国宝）は、漆塗りの美しい春日厨子に安置されている。慈覚大師作といわれるが、作風は平安時代の後期のものと思われる。このほかにも、長徳三年（九九七）九月二十

日に、仏師信弘の弟子・平山が本願として奉納したという銘文も彫つてある。これは、江戸時代に百姓豊七が霊夢により近くの寺院跡から発掘したといわれる。

本堂裏から宿入橋を渡ると山にさしかかる。入山するには、寺務所の許可を得なければならぬ。四月十七日・十八日は春の縁日、七月十七日・十八日は秋の縁日である。

奥院（投入堂）

寺伝によれば慶雲三年（七〇六）に役の行者（役小角）が法力をもつて岩窟に投げ入れ建立したという。子守勝手蔵王三所の一つとして蔵王権現堂とも呼ばれる。

堂は安山岩溶岩流と擬灰角礫岩の接触部にできた岩窟内に建立され、標高五〇八メートルの高所にあつて通称笠岩に守られ、千年を超える風雪に耐えて現在に至っている。

堂の柱は床下に延ばして長短さまざまに崖のくぼみに立ち、柱は筋違でつなぎ止められている、いわゆる崖造（舞台造）である。身舎は桁行二間・梁間一間で、身舎の前面と右側面の二方に幅一五〇センチほどの

廻縁をつけている。身舎の屋根は緩やかで、庇は正面と両側面を片流れの縫破風とし、さらに右隅も一段低い縫破風をつけて変化をつけている。

身舎の柱は円柱であるが、庇を支える柱は大面取の角柱で、軒の反りなどと合わせて藤原時代の特徴をよくあらわしている。

付設する愛染堂は柱上井桁に組む土台の上に置かれた方一間、切妻入の小堂で、投入堂と同時期の作と考えられる。

納経堂

寺伝によると慶雲三年（七〇六）の創建とあるが、確証はない。もともと三徳山の鎮守としての祠であつたものを納経堂にしたもので、堂内には法華塔が一基ある。

堂は観音堂と並んで投入堂と同様に巖窟状のくぼみに建つ。小堂ということもあるが、数百年の風雪に耐えてきたものである。桁行一間、梁間一間、向拜付き、春日造こけら葺である。柱、肘木の面は大きく、古式を伝えている。建築年は、投入堂と同様、先頃の年輪年代式測定で平安後期の作ということが判明し、

現存する神社、殿形式の建物では最古であることが判明した。

地藏堂

本尊は子守延命地藏菩薩、安産の守護神で、古くは御子守殿という。堂の創建は嘉祥二年（八四九）慈覚大師によるというが確証はない。

堂は崖上の岩角にあり、桁行四間、梁間三間、こけら葺、単層入母屋造で崖造（舞台造）の建築で、背面妻中央には軒唐破風がつけてある。軒は二軒繁垂木で、肘木・桁・垂木とも面をとる。内部は、厨子両脇柱と後壁の柱四本が円柱で、その他は大



面取の角柱である。内陣は外陣（礼堂）より一段高くなっており、厨子脇の別室は禅定写経などの場に使用された籠り部屋である。天井は全て化粧屋根裏である。

実肘木や拳鼻がついている斗組、頭鼻木鼻の絵様、角張った支輪の様式から室町時代末期の作と見られている。

文殊堂

本尊は文殊菩薩。寺伝によると、創建は、嘉祥二年（八四九）慈覚大師によるとある。しかし、当初より蔵王権現とともに三所権現の一つとされてきた。

堂は桁行四間、梁間三間、こけら葺の単層入母屋造で、急峻な岩場の尾根に建つ懸造で、堂の四方には縁が巡っている。正面は西方に向かっているが、後部に安土桃山時代に流行了した軒唐破風が取り付けてある。地藏堂と規模・様式とも同じであるが、内陣は二本の円柱が立ち、天井は鏡天井になっている。全体的には地藏堂を模しながら、それを多少整備している。内陣の鏡天井なども意匠的にまとまっていることが

ら、地藏堂の後の建立と見られている。様式の類似性から室町時代末に建造されたとする見解があるが、陰刻名などから見て、桃山時代のもものと見られている。

観音堂

岩窟内に建てられた桁行三間、梁間三間の堂。正面と側面の三方に縁を巡らし正面側の一部は懸造りとなっている。江戸初期に建築されたと推定され、これは正保五年（一六四八）に鳥取藩主・池田光仲再興の寺伝と合致する。

奥二間を内陣、表一間を外陣とし、内陣中央に厨子が置いている。軒は一軒繁垂木、屋根は入母屋で、両側面に千鳥破風を付し、変化に富んだ屋根の形となっている。

鐘楼堂

四隅に大面取角柱を建て、枳肘木を乗せ、桁を組み、中央部に梁を架け梵鐘を吊している。角柱は内方にわずかに転び、上下二本の貫で固められている。軒は一軒繁垂木で、屋根は切妻こけら葺、三徳山全体を描いた

繪図にはこの建物が入母屋となっているが、当初から切妻だったと思われる。

現鐘楼は、大正十四年（一九二五）に修理され、大半の部材が取り替えられたが、枳肘木、破風板の一部に古材が使われている。柱の面取り手法等が古制を伝え、鎌倉時代の力強さもうかがわせる。

不動堂

寺伝によると、本尊の不動明王は慈覚大師の作とされる。『伯耆民談記』（一七四二）には「大山善神方三尺五寸」とあり、後の不動堂となったもので、投入堂横の崖上に建つ小堂である。不動明王は、修験者が愛染堂の愛染明王や投入堂の蔵王権現と一体化し、降魔除災の超能力を得ようとして尊信してきたものである。

身舎・庇ともに角柱で、身舎と庇を海老虹梁でつないでいる。軒は一軒繁垂木で庇には縁を設けて高欄をめぐらす。木鼻や墓股等にも意匠がこらされている。古材は軒桁と板壁の一部に残るだけで、全体的には江戸末期の造りである。

元結掛堂

観音堂脇の岩窟内に建てられた一間社春日造の小堂。身舎は円柱、庇は角柱、舟肘木、軒一軒繁垂木の簡素な構造で、庇には縁がつくが、階段は省略されている。舟肘木、破風、懸魚などに江戸初期の特徴が見えることから、観音堂とほぼ同年代の建造と推定される。寺伝によると、三仏寺で剃髪して僧になった者の髪を元結ごと納めた堂とある。

十一面観音堂

一間社春日造、野際稲荷とも称される小祠である。身舎円柱、向拝角柱でいずれも土台上に建っている。正面板扉定規縁の六葉金具、懸魚などの細部意匠には江戸中期の様式がうかがえる。

【国等指定文化財の状況】

奥院（投入堂） 国宝（昭和二十七年三月二十九日）
納経堂 国指定重要文化財（明治三十七年二月十八日指定）
地藏堂 国指定重要文化財（明治三

十七年二月十八日指定)
 文殊堂 国指定重要文化財(明治三十七年二月十八日指定)
 銅鏡 国指定重要文化財(明治三十七年二月十八日指定)
 木造蔵王権現立像 国指定重要文化財(明治三十七年二月十八日指定)
 木造十一面観音立像 国指定重要文化財(大正九年四月十五日指定)
 木造蔵王権現立像六躯 国指定重要文化財(大正九年四月十五日指定)
 木造狛犬一对 県指定保護文化財(昭和六十二年十二月二十五日指定)
 三仏寺・銅像誕生釈迦仏立像 県指定保護文化財(平成七年四月二十一日指定)
 三仏寺写経 町指定有形文化財(昭和五十年六月十一日指定)
 観音堂 町指定有形文化財(昭和五十年十月十三日指定)
 鐘楼堂 町指定有形文化財(昭和五十年十月十三日指定)
 不動堂 町指定有形文化財(昭和五十年十月十三日指定)
 元結掛堂 町指定有形文化財(昭和五十年十月十三日指定)
 十一面観音堂(野際稲荷) 町指定有形文化財(昭和五十年十月十三日指定)

三仏寺・男神・女神座像(坐像)
 町指定保護文化財(昭和六十三年十月一日指定)

宮本包則刀 町指定保護文化財(昭和六十三年十月一日指定)
 正善院庭園 町指定名勝(昭和六十三年十月一日指定)

三徳山の権現祭

東伯郡三朝町の三徳山で、四月十八日に行われる春の祭礼である。地元では「春会式」と呼ばれる。昭和初期までは獅子・具足・奉楽・神・幟・三宝・御輿・寺院方・僧侶・御徒・烏帽子の順に御幸行列が境内を盛大に練り歩いてきたが、昭和三十年(一九五五)の本尊、蔵王権現の修理完成を記念して行われたのを最後に途絶えている。

かつての御幸行列は、正午に本堂を出立し、石段を降りて馬場(現在の宝物館・収蔵庫の建つ場所付近)の御旅所に安置され、僧侶が読経をした後、裏手の坂を登って本堂に戻り、御輿が納められた。
 現在、御幸は行われず、二体の御輿(蔵王権現と三仏寺といわれる)が本堂に出されて飾り付けられる。

大雲寺

東伯郡三朝町穴鴨
 JR倉吉駅よりバス十五分、三朝町役場前下車・乗換、穴鴨公会堂下車
 徒歩五分

山号を西照山といい、浄土宗に属する京都知恩院の末寺だった。本尊は阿弥陀如来である。

この寺の縁起によると、空也上人が穴鴨谷に西照庵という庵を結んだことに由来するという。その後、庵は度々無住となったが、慶長年間(一五九六〜一六一五)に、倉吉に流罪になっていた房州里見安房守を訪ねて来た知恩院三十一世靈巖が、当庵に泊ったとき、その由来を聞いて、西照山靈巖院大雲寺として再興した。

その後、この地の安田茂右衛門という者が寺を穴鴨谷から現在地に移した。そのため、靈巖を開山、茂右衛門を開基としている。

昔は、北に山門、東に冠木門があり、その他にも鐘突き堂があって、池には泉水が吹き出し、反橋のかかる立派な寺院だったといわれるが、弘化三年(一八四六)の村火事に類焼し、規模は小さくなった。河村郡札所の第五番札所である。

馬場の滝

東伯郡三朝町小河内
 JR倉吉駅よりバス二〇分、三朝町役場前下車、車で二〇分、小河内集落から約一・五キロ

三朝町内を流れる福吉川下流にあり、高さは約五〇メートルで三段からなる水量豊かな滝。馬場の滝は、かつては不動尊滝と呼ばれていたが、江戸時代の鉄山師山口屋(内海家)が元禄七年頃までこの地でたたら製鉄を行い、砂鉄・木炭・銑鉄の輸送のために馬場が設けられ繁栄していたことから、この名に呼び変えられた。

花倉山のヒノキ・ホンシャクナゲの大群落

東伯郡三朝町笏眞
 JR倉吉駅よりバス四十五分、小河内下車、徒歩一〇分

ホンシャクナゲはツツジ科に属する。昭和三十九年(一九六四)一月、県の天然記念物に指定された。ホンシャクナゲの大きなものは根回り五〇センチメートル、樹高五メートルある。このような巨木が一〇メートル四方に九本ある。

花倉山は花倉権現とよばれ、若葉神社があり日帰りの行楽にも適する。ホンシャクナゲは小鹿溪、三徳山、那岐山等にもあるが、ここほど標高の低い場所での大群落は他にあまり例がない。開花は四月下旬から

で、近年花見客でにぎわうようになった。漢名の「石南花」は本種に誤ってつけたものという。

垢離取川

JR倉吉駅下車よりバス四〇分

霊場三徳山の雨水を集めて流れる清流。昔、参拝者がこの水で身を清めて入山したと伝えられる「身清めの滝」がある。また、滝に打たれると身体の「こり」がとれるという言い伝えもある。

歴史ある水として昭和六十年（一九八五）六月、県の「因伯の名水」に指定された。

「森林浴の森一〇〇選」にも選ばれた豊かな自然のなかにある。

三朝高原

県中部、三朝温泉のすぐ南にある標高三〇〇〜四〇〇メートルの高原で、三徳山山塊の西端部にあたる。カンラン石玄武岩溶岩とその上層の安山岩質凝灰角礫岩からなり、溶岩台地状の地形である。これらの火山噴出物は鮮新世の三朝層群坂本安山岩類に属するもので、基盤岩である白亜紀末期の黒雲母花崗岩を不整合

に覆っている。不整合面上には、場所により砂岩・礫岩や珪藻土層などがはさまれ、木の葉などの植物化石を産出する。

名勝 小 鹿 溪

東伯郡三朝町神倉
JR倉吉駅よりバス四〇分
三朝温泉下車、神倉行乗換
二〇分、終点下車、徒歩
三〇分

天神川水系三徳川の支流である小鹿川上流部の峡谷で、三朝町神倉から上流の中津ダムまでの、流長にして約三キロの区間。昭和十二年（一九三七）年に国の名勝に指定されている。

渓谷の上端と下流側には、それぞれ河床勾配の急な所と緩い所があり、渓谷区間は小鹿川の急流部にあ



たる。渓谷は約六千万年前の白亜紀末〜古第三紀初頭に貫入した人形峠花崗岩とよばれる角閃石黒雲母花崗岩の分布域内にあり、渓床には浸食された花崗岩岩盤や、花崗岩巨礫の集積が見られる。岩盤の露出する所では、滝と淵とが連続し、この渓谷

に特徴的な美しい景観をつくりだしている。神縄滝と雄淵、玉藻滝と雌淵、水晶滝と弥六淵がその代表で、探勝の中心となっている。とくに雄淵は深さが九メートルに達し、その景観は神秘的である。渓床に集積する花崗岩巨礫には、直径四メートルを越える巨大なものがあり、これも小鹿溪の見所の一つといえよう。間隔が広く節理が発達した花崗岩の谷壁からは、節理に沿って割れた大塊が渓床へ崩落し、運搬されることなく滞留して、巨礫の集積帯となっている。

中津ダムによって堰き止められた中津貯水池の水は、隧道を通して渓谷入口の小鹿第一発電所まで送水され、発電に使われている。これは、渓谷急流部の地形的高低差を利用した水力発電である。

渓流の左岸側には中津へ至る道路が平行して走り、渓谷内では渓床に

沿う約一キロの遊歩道が整備されている。新緑や紅葉の季節には、探勝に訪れる人々ににぎわう。

また、小 鹿 溪 の 渓 谷 植 物 は 美 し く、シラカシ、アカガシ、ソヨゴ、ヤマグルマ、ホンシヤクナゲなどの常緑広葉樹や、ブナ、イヌシデ、トチノキ、オニグルミ、サワグルミなどの落葉広葉樹が群落を構成している。この谷間は近くの三朝に比べて、七度ほど気温が低い。これは谷間全体が風洞の働きをするからである。このため中国地方では八〇メートルあたりから上部に生育するブナが、小 鹿 溪 では四〇メートルあたりから生育している。

また、中津盆地は標高五五〇メートルに位置するが谷より温度が高い。そのため谷部では下にブナ、その上部にミツナラ、アカマツと垂直的には反対の分布を示している。紅葉は、通常、上部から下部に移行するがここでは反対に下から山の上に向かって移る。そのほかにもシダ、コケ、地衣などが北方系の景観をなしている。

福山

東伯郡三朝町福山
JR倉吉駅よりバス五〇分、福山下車、徒歩六〇分

竹田川の上流にあり、やや岡山県境に近い高原地帯の部落である。この付近には不動滝があり、隠れた名勝地として将来に期待のもたれているところである。

古くは部落を取り囲むように一面にミズゴケの大群が発達し、湿原のなかにはノハナシヨウブの群落もあり六月下旬から七月上旬にかけての花ざかりは壮観であった。しかし、昭和五十年代に谷川が改修され湿原がなくなり、ミズゴケやノハナシヨウブも急減した。

不動滝は、この大湿原の水が竹田川の上流で福本川となった、この福山と小丸山の間にある。現在、不動社は肩山に移された。

不動滝は三段で、高さが四〇メートルある。どうどうと落下している瀑布は大風をまき起して、夏でも肌寒い。

付近にはホンシシャクナゲ、クロソヨゴ、イワナシ、イワウチワ、イワタバコ、オサシダなどが生育している。

福本のツバキ

東伯郡三朝町福本
JR倉吉駅よりバス五〇分、上西谷下車、徒歩三〇分

福本のツバキは、天神川の上流福本川に沿って三朝町から岡山県中和村に抜ける国道四八二号と、関金町に抜ける林道との分岐点近くに位置する、三朝町福本地内に生育する。

自生のヤブツバキで、県の天然記念物に指定された昭和四十八年時には大木が二本並び祠もあつたが、現在は、高さ六メートル、枝の広がり八七メートルの大木が一本ある。毎年みごとな花を咲かせ実をつける。

このヤブツバキは昔、油を採取するために村人から保護されていたという。また作州往来の旅人の休息場所として利用され、ヤブツバキの根元近くからはきれいな清水が湧き出ていたと伝えられている。「とつとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

周囲の木が伐採され、日照が強くなったために樹勢に衰えが感じられる。

人形峠

東伯郡三朝町栗祖

国道一七九号が三朝町から岡山県

上斎原村石越へ越える標高七三五メートルの県境に位置する。尾根伝いに、南は人形仙（標高一、〇〇四メートル）が控え、北に高清水高原（標高七三三メートル）が控え、北に高清水高原が広がっている。ブナやナツツバキの混じる樹林やチシマザサの草原など変化に富んだ植生景観が見られ、ムカシブナなどの化石植物群も掘り出されている。江戸時代には打越峠と呼ばれ、津山往来の要衝として知られた峠道である。

当時の峠は、三朝町木地山から谷を詰め人形仙の肩を越える道にあり、今も石地蔵が残る。木地山集落は、かつて文字通り木地師の村であった。ここにある小椋家住宅は残り少ない木地師の民家建築として、三朝町の保護文化財に指定されている。

昭和三十年（一九五五）、ウラン鉱脈が発見され一躍全国的に有名な峠となった。国鉄バス（現JRバス）が通る自動車道が整備され、翌昭和三十一年（一九五六）に人形峠という名称が付けられた。この人形峠の名は、昔々、大きいクモが住んでいて、峠を通る旅人を食い殺すので一計を案じ、木偶人形を立て食いついた大クモに遠矢を射掛けて退治したとの伝説に由来する。今も、トンネ

ルの手前から入る山越の旧道として利用されている。旧道には核燃料サイクル開発機構（JNC）の施設がある。

現在、国道は人形トンネルによって一気に県境を走り抜ける。このトンネルは昭和五十六年（一九八一）に開通したもので、延長は一、八六五メートル、鳥取県側の標高は六〇二メートル、岡山県側は標高六一〇メートルに位置し平坦である。

また、国道一七九号と四八二号は峠の前後で重なる。倉吉市から来る国道一七九号は、上斎原村から奥津町を通り、津山市、さらに姫路市へと向かい、佐治村から恩原高原を抜けてきた四八二号が上斎原村石塚で一七九号につながり、峠を越えて三朝町穴鴨で分かれて蒜山高原へと向かっている。

人形峠は、現在も交通の要所であり、中国山地の高原観光や山岳ドライブの臍の役割を果たしている。

高清水高原

東伯郡三朝町・岡山県上斎原村
JR倉吉駅より車で八〇分

鳥取県と岡山県の県境にまたがる標高八〇〇〜九五〇メートルのなだらかな高原。面積は約三〇〇ヘクタ

ール。台地は安山岩溶岩からなり、表面は芝生や低木で覆われる。南側には玄武岩・火山碎屑岩・礫岩からなる人形峠層がある。もともとは放牧地であった。

晴れた日は展望もよく、日本海側や岡山県側の山々を一望できる。春のワラビ狩り、夏のキャンプ、秋の紅葉と楽しむことができる。

関金町

温泉
せきがねおんせん
関金温泉

東伯郡関金町関金宿
J R倉吉駅よりバス三十五分、関金温泉下車

岡山県との県境、蒜山三山の懐に位置し、「白銀の湯」と呼ばれる。聖武天皇の時代（七二四〜七四九）に行基が開湯したとも、あるいは延暦年間（七八二〜八〇六）に開湯したともいわれる。

小鴨川の支流矢送川と滝川の合流点に位置し、作州街道と大山への分岐点に当たる宿場町として、また湯治場として栄えた。寛文六年（一六六六）までは湯壺が二か所、宿屋が二軒であった。当初は滝山川の谷だけに温泉があった。温泉が今のようになったのは、昭和三十八年（一九六三）に行われた泉源調査により新しい泉源が掘られたことによる。豊富な湯は、集中管理され、国民宿舎や共同浴場が整備された。昭和四十五年（一九七〇）には国民保養温泉地に指定された。

現在、二十四の泉源があり、うち三泉は自噴している。また、五つの未利用泉がある。平均温度は六十

六・五度、湧出量は毎分四二八・四リットルである。単純放射能泉で、リュウマチ、神経痛に効能があるという。温泉周辺は花崗岩で構成され、二方向に発達する割れ目から湧出するものと考えられる。泉質に含まれる放射能は、湧出の過程に岩石や温泉沈殿物から溶出したものと考えられる。

伝説
弘法大師がある民家を通りかかったとき、女が芋を洗っていた。大師が芋を分けてもらいたいと頼んだところ、女は大師を旅の貧乏僧とみて、この芋はとてもえぐい芋なので食べられないと断った。僧は笑みを浮かべ、何も言わず立ち去った。それ以来、芋は本当にえぐい芋になってしまったという。



温泉
せきがね
湯命館

東伯郡関金町関金宿
J R倉吉駅よりバス三十五分、関金温泉下車、徒歩五分

蒜山 大山に抱かれた関金温泉に、平成七年（一九九五）四月に開館した。雄大な山々を望むことができる露天風呂をはじめ、八種類の風呂が楽しめる。

開館時間 午前一〇時〜午後九時
休館日 第二・四・月曜日

問合せ先 ☎0858・45・2000

地蔵院

東伯郡関金町関金宿
J R倉吉駅よりバス三十五分、関金温泉下車、徒歩五分

地蔵院は、山号を大滝山といい、真言宗御室派（京都仁和寺）に属す。

本尊は僧・行基ぎよきの作と伝えられる大日如来である。かつては現在地より二キロメートル山に入った現奥の院にあり、大滝山千手寺といわれた。

天平勝宝八年（七五六）、行基によつて開かれ、行基作の千手観音を本尊にしたと伝えられる。この寺は天曆三年（九四九）焼失したが、建久三年（一一九二）、佐々木高綱によつて再建された。また、奥の院の観音堂に残る建久三年（一一九三）銘の棟札にも「供養成就 佐々木四郎高綱」とある。その後も洪水、山崩れで崩壊・再建を繰り返した。近世には大滝堂とも呼ばれた。

維新後、寺院維持のため、奥の院坊・千手寺は大滝山観音堂として従前の地に移り、本坊地蔵院は分離し現在地で存続することになった。

当院の地蔵堂に安置されている木造地藏菩薩半跏像は、国の重要文化財に指定されている。これは、像高が四・八メートルあり、延命地藏といわれる。胎内の銘文には、「建久二年（一一九二）源頼朝の命により佐々木四郎高綱の造立」とある。このほかに、至徳二年（一一三五）銘の擬宝珠と宋代青磁香炉が所蔵され、いずれも県の保護文化財に指定

されている。

伝説

佐々木高綱が地蔵院を再建したときのこと。大工の棟梁は腕もよく人望もある人だった。しかし、完成期限がせまっても工事は一向に進まなかった。その頃から小人のような大工が夜間に工事を手伝い、予定通りに完成した。そして、完成と同時に小人大工は姿を消した。彼らは工事で出たカンナ屑が小人に変わって手伝ったのだらうと噂した。

また、ある年、地藏菩薩の肩間にはめ込まれた白毫を、旅の役者が盗んだ。それ以来、関金宿で旅芸人が芝居をすると、必ず大雨が降ると伝えられている。

鳥飼家住宅

東伯郡関金町関金宿
JR倉吉駅よりバス三十五分
関金泉下車、徒歩五分

鳥飼家は関金町大鳥居にあつて代々庄屋を営み、主屋が建築されたのは江戸後期と考えられる。伝承によると、鳥飼家は九州から小早川秀秋あきに仕えて戦国時代の終りころ当地

に移り住んだという。鳥飼家には、制作年代が不詳であるが、一枚の家相図が伝わっている。それによると屋敷は広く、主屋以外に表門、土蔵、米蔵、味噌蔵、木小屋、裏門、隠居屋、井戸があつたことがわかる。主屋は、桁行九間半、梁間四間と大きく、上手の三室と「広間」からなる

広間型三間取りが変形した広間型四間取りで、土間部分の奥には台所として使用された「座敷」が「広間」から延びるように付設され、「広間」の裏側には幅一間の「料理間」が付いている。また、土間の下手には「牛小屋」（マヤ）が三室並列し、その奥に「下人室屋」が設けられていた。さらに、主屋の上手には「湯殿」と「雪隠」を付設していたが、この湯殿と便所は表側と裏側からそれぞれ使用できるように二つずつ設けられ、客用と家族用を使い分けられていたと思われる。この地を支配する庄屋クラスの屋敷構えと家構であつたことがわかる。

現在、関金宿に移築された鳥飼家住宅は、家相図と解体作業によつて明らかとなつた古材などの痕跡から、建築当初の姿に復元されたものである。茅葺き屋根は葺降ろしとな

り、小屋梁は大黒柱とその前後一間半のところにそれぞれ立つ入側柱によつて直接支えられており、土間は三和土（たたき）仕上げとなるなど民家のもつ素朴な姿が忠実に復元された。

古民家での生活が実体験できる施設として一般に公開されている。

昭和四十九年（一九七四）三月、県の保護文化財に指定された。

関金のシイ

東伯郡関金町関金宿
JR倉吉駅よりバス四〇分、関金町役場前下車、徒歩で一〇分

関金温泉から小鴨川を挟み、対岸の安歩集落の段丘の上に一本のスタジイの巨木がそびえたつている。

樹冠は大きく傘状に広がり、その均整の取れた雄大な姿は、あたかも森のように見え、遠方からも目をひくほどである。

胸高直径は二三〇センチ、樹高は一八メートル、枝は二〇×二五メートルに広がる。大山の火山灰が腐食してできた肥沃な黒ほくに恵まれたことによつて、樹勢はきわめて旺盛である。

幾度かの小鴨川の氾濫にも耐えながら安歩集落を守りつづけた名木として昭和四十八年（一九七三）三月

に県の天然記念物として指定された。「とつとりの名木一〇〇選」にも選ばれている。

大山池

東伯郡関金町泰久寺
JR倉吉駅より車で四〇分

大山ならびに蒜山三山を水面に映し、ヨット、ボートなどの水上スポーツが楽しめる水辺として親しまれている。

周囲は天神野台地と呼ばれ、黒ぼくの火山灰土からなる台地が続ぎ、野菜畑、梨畑、さらに芝生畑となり開けている。西に、大山から蒜山三山が連なり、空の広さと吹く風のがすがしさにしばし時を忘れる。

もとは狼谷溜池と呼ばれ、地元の農地灌漑用の溜池として造成されたものである。明治四十年（一九〇七）泰久寺の山根愛吉ら有志が台地の開拓と溜池造成を手がけたものが最初であった。その後拡張され、昭和十八年（一九四三）から二か年かけた大工事で現在の規模となった。周囲は一・四キロメートル、面積は一五ヘクタール。

堤防の上から湖面を見ると大山が逆さに映り、いつ頃からか大山池と呼ばれるようになった。なお、毎年

十月には関係者総出で池の水を落として大掃除が行われ、このときコイヤフナの手づかみに見物客が集まる。今ではレクリエーション地域としての整備も進み、キャンプ場、ボートの艇庫、駐車場、休憩所、さらにはツツジ園が整備され、中国自然歩道のコースになっている。

近くには、奈良時代の寺院跡で塔礎石が残る藤井谷廃寺があり、倉吉市の伯耆国分寺跡も近い。ドライブやハイキングに好適な場所である。

犬狹峠

東伯郡関金町犬狹

旧国道三一一三号が関金町山口から岡山県八束村敏の茶屋へ越える県境にある。標高は五二四メートル。大山隠岐国立公園の蒜山地区にあり、蒜山三山の内、下蒜山の一角を占める。旧国道は七曲の難所であったが、平成九年（一九九七）、山口集落の手前から新しく犬狹峠道路と犬狹トンネルが開通し、新しく国道三一一号となった。トンネルの延長は二一六二メートル、標高は鳥取県側で三七一メートル、岡山県側で四四一メートルである。鳥取県側入口から八三六メートルの位置で県境を越える。

犬狹の語源ははっきりしない。犬狹峠とも書く。犬も通れないほどの急坂だったとか、その昔、大和武命が西国平定の折、矢の届く限りの敵は従えと射った矢が刺さった「矢はさり」からきたとか諸説がある。江戸時代から作州街道あるいは美作街道と呼ばれ、倉吉と岡山県北を結ぶ主要な経路であった。当時、倉吉は脱穀用の千歯こぎ、木地椀や綿製品など、近隣の産品の集散地であり、街道はにぎわった。

倉吉市からは天神川水系の小鴨川に沿って走り、関金温泉を通り過ぎてすぐ左折する。橋梁で結ばれた谷筋を渡り、間近に迫る蒜山を見るドライブは迫力がある。また、大山も遠望できる。従来見ることでできなかった北東部の山体が美しい。また、蒜山側からトンネルを抜けてはるか下に見る日本海の漁火は幻想的で印象深い。なお、新しい峠道には道の駅「犬狹」があり、豊富な地元産物を手にすることができる。

物の道 道の駅「犬狹」

東伯郡関金町山口
JR倉吉駅より
車で六〇分

国道三一一三号が関金温泉を通り抜け、犬狹峠の新しいトンネルの上

りにかかり、大山や蒜山をまじかに見ながら渓谷に架かる橋梁を走ると左手に道の駅の表示に出会う。堂々とした和風の木造建築がおしゃれな道の駅である。平成九年（一九九七）十月に登録され、翌年八月にオープンした。

標高三一三メートルの山間にありながら敷地は広く、四十台の駐車場スペースがある。

関金町や倉吉市ははじめ県境を挟んで、岡山県側の八束村、中和村など関係団体が共同出資するという広域的な組織によるユニークな運営である。

販売される特産物も鳥取と岡山両県から広域に集まり、多種多様である。山菜やきのこ、地元農家の生産する高冷地野菜のほか、山村の加工グループによる手作りの漬物や食材が並ぶ。牛乳など蒜山のジャージー牛製品も直売される。かつて木地師が活躍した土地柄か、椀やお盆の木工製品も多い。

なお、敷地には小川の流れる緑地公園が造られ、一時のやすらぎを生む空間となっている。

関金田植唄おどり

田植唄踊りは、大山^{だいせん}周辺に伝わる「かつま」(田植え唄)に合わせて、かつての花田植えの姿を再現した踊りである。場所によっては、馬鋤を引く牛のユーモラスな演技などで笑いをとる要素が加わっているものもある。

関金町では、昭和三十九年(一九六四)、町内の有志によって古老の間に伝承されていた古い民謡をもとに、かつての田植風景を近代的に振り付けたものである。

北条町

北条砂丘

東伯郡北条町 羽合町、大栄町

天神川河口から大谷集落までの東西約二キロメートル、南北一・八キロメートル、面積一、一〇〇ヘクタールに達する起伏の緩やかな砂丘である。天神川の東にも長瀬砂丘とか羽合砂丘と呼ばれる砂丘があるが、もとは一連の砂丘であった。

北条砂丘は、約二十万年前の第四紀の更新世につくられた。海岸線に平行して一列の砂丘列がある。その内側には斜交した縦列砂丘や複雑な起伏の砂丘が見られる。そこには大山火山の火山灰層に覆われた古砂丘が発達し、その上を新砂丘が覆っている。新砂丘も腐植に富むクロスナによってさらに細分できる。クロスナは人類遺跡をとめない、過去に砂丘が草原化し、快適な生活の場であったことを物語っている。特に、長瀬高浜では砂丘の地下に縄文時代と弥生時代以降の遺跡と遺物、畑の遺構が発見された。

また、古くから砂丘地農業が行わ

れ、県下有数の農地であり、スイカやながいも、ぶどうが盛んに栽培されている。北条砂丘の砂は建設用に用いるため大量に採取され跡地は平坦化され大規模な農地となった。

現在、北条バイパスが砂丘の中を通り、近くには北条オート・キャンプ場道の駅「北条」が整備され、休憩地として広く利用されている。砂丘の南に北条平野が広がる。



茶臼山

東伯郡北条町国坂

国坂山とも呼ばれ、北条平野に孤立する標高九五・九メートルの

茶臼山には、中世に増田玄蕃允・在沢左京亮が居住していたと伝えられている。山麓の東側に「殿屋敷」「馬場」などの小字が残る。茶臼山の山麓には、『延喜式神名帳』にもみえる伯耆六社の一つ、国坂神社がある。

天正九年(一五八一)羽柴(豊臣)秀吉は鳥取に進出し(第二回鳥取役)、この時、鳥取城を準備する吉川経家を応援する吉川元春は、本隊を率いて伯耆に入り、茶臼山に着陣、さらに「馬ノ山」に本営を移した。秀吉は御冠山(東郷町宮内)に布陣し、河村郡(現泊村、東郷町、羽合町、倉吉市の一部)で対峙した。元和三年(一六一七)、因伯両国を領有した池田光政は、両国のほぼ中央にある久米郡茶臼山を「城府」ととりたてる候補地の一つに選んでいる。しかし新地のために、費用がかさむこともあり最終的に鳥取城下の拡張が決まり、鳥取城下町の整備が進められることとなった。茶臼山の付近には現在、北条町役場や北条町歴史民俗資料館もある。

国坂神社

東伯郡北条町国坂
JR倉吉駅よりバス二〇分 国坂下車、徒歩一〇分

国坂神社は、明治元年（一八六八）に現社名に改められるまで、四宮大明神といわれた。少彦名命を祭神とする。この神社は『延喜式神名帳』にも記載された古社である。

中・近世には武将の崇敬も厚く、大永年間（一五二二〜二八）には、国坂地内にある茶臼山城の城主・増田玄蕃允が、同社を再興したと伝えられている。竹内自安（近世米子の商人歌人・一六三八〜一七〇八）は、元禄四年（一六九一）五月に、当社に詣でたとき、宮司宅で「かけまくも名にあらはれてこの神の国さか（栄・坂）へよと宮はしめけん」と詠んでいる。

また、かつて神社の東にあった神池（御手洗池）に群生したジュンサイ、コウホネを煎じて飲めば靈験があるといわれ、遠近から信者が集まった。三月八日（四月八日とも）が薬草の祭日で、神池や茶臼山の薬草を採って九日の未明に海辺に持ち出して清め、神社に供えた後、参詣者に分配する神事があったという。

北条八幡宮

東伯郡北条町北尾
JR下北条駅より徒歩一〇分

北条八幡宮は、近世には山田八幡宮ともいわれた。誉田別尊などを祭神とする。貞観七年（八六五）に豊前宇佐八幡宮から勧請したとの説もあるが、山城石清水八幡宮の伯耆四別宮の一つ、山田別宮の後身とする説が有力である。

永禄五年（一五六二）、岩倉城主・小嶋元清が社領五百石を、天正八年（一五八〇）に吉川元春が馬鞍を寄進している。元和二年（一六一六）には里見阿波守忠義が社殿を再興するなど、当社は武将に崇敬されてきた。

明治六年（一八七三）には山田社、同二十六年（一八九三）には八幡神社、昭和六十三年（一九八八）には北条八幡宮と改称された。

ここには、祭神の一人である神功皇后が休まれたと伝えられる「御休み石」や、祭神である武内宿禰が誉田別尊を抱き腰を掛けたという「御子抱石」（「安産岩」とも）などが残っている。

土下古墳群

東伯郡北条町土下
JR下北条駅より徒歩二〇分

標高一〇〇メートル前後の低丘陵上に築造された古墳群である。北条平野を一望できる丘陵に総数約二百八十基以上が確認されている。古墳の規模は、直径十数メートル前後の円墳がほとんどだが、方墳や大型の円墳、前方後円墳も含まれる。

このなかで最大規模の二三六号墳（通称北条大將塚）は、丘陵尾根上に立地する直径約四〇メートル、高さ約五メートルの円墳である。丘陵の高所には、白斑点をつけた鹿埴輪（重要美術品）が出土した「やすみ塚」と呼ばれる全長三二メートルの前方後円墳（二二三号墳）がある。

これらの古墳のほとんどが未調査だが、これまでに十基が発掘調査された。昭和五十七年（一九八二）に調査された一二九号墳は、四世紀後半に築造された一辺二〇メートル前後の方墳で、箱式石棺七基・土壙墓三基・土器棺一基が確認された。

平成五年（一九九三）には、やすみ塚に隣接する二一〇号墳が調査され、周溝内から人物埴輪・馬形埴輪・短甲形埴輪が出土された。人物

埴輪のうち両手を挙げた女性像は白く点描して鹿皮を表現した衣装をまとっている。これはやすみ塚出土の鹿埴輪と同じ表現である。このような白色点描により鹿毛を表した埴輪は、ほかに倉吉市の沢ペリ七号墳の人物埴輪にみられるのみで、全国的にも珍しい彩色埴輪である。

北条町歴史民俗資料館

東伯郡北条町田井
JR倉吉駅よりバス二〇分 国坂下車、徒歩五分

北条町は、町の面積の四十四パーセントを砂丘地が占めている。現在、砂丘地は先進的な灌漑設備が整備され豊かな農地として活用されている。

平成二年（一九九〇）十一月に開設されたこの民俗資料館は、砂丘地に挑んできた人々の歩みが展示されている。また、北条町には縄文・弥生時代などの遺跡が数多くあり、土器、石器、哺乳類の骨、木船などの遺物が数千点保管されているほか、近代洋画壇で活躍した前田寛治画伯の作品、曹洞宗管長を務めた日置黙仙禅師の資料など、業績を遺した郷土の先人が紹介されている。

開館時間 午前九時〜午後四時三〇分
休館日 月・火曜日、祝日の翌日、年末年始（展示により変更あり）

問合せ先 ☎ 0858・36・4309

道の駅
物産
「北条公園」
東伯郡北条町国坂
JR下北条駅より車で五分

国道九号が北条バイパスに入って中ほどの、国道三二二号との分岐点に位置する。そこには北条砂丘が延々と続き、砂丘海岸はクロマツ林に覆われている。これらのクロマツは飛砂から農地を守るために保安林として植えられたもので戦時中はこの松から脂を採取した。周辺の農地は、スプリンクラー灌漑の施設が完備されていて、定期的に一斉に散水される様子が砂丘独特の農村風景となっている。

平成五年（一九九三）十一月に道の駅の指定を受けた。以前からあった特産物販売所を中心に、レストランや売店、屋根付き広場「希望の館」がある。駐車場は百二十六台収容できる。ながいも、らっきょう、アムスメロン、ぶどう、トマト、いちじく、さらには二十世紀梨と季節に応じた品揃えが豊富である。

海岸林には、「いこいの浜北条オートキャンプ場」がある。オートキャンプサイト、バンガロー、一〇〇張り分のキャンプサイト、温水シャ

ワーなどが整備されている。海と松林に囲まれたキャンピングは快適で、人気のサイトになっている。

日置黙仙ひおきもくせん

日置黙仙は、永平寺貫主、曹洞宗管長を務め、仏教界に偉大な足跡を残した。

弘化四年（一八四七）、伯耆国久米郡島村（現在の東伯郡北条町島）の農家に生まれた。本名は源之助という。母、弟と相次いで死別、十二歳で仏門に入った。

明治新政府が神道を国教とし、神仏分離の政策をとったため、各地で仏教は排撃され寺や仏像が破壊されるなど、受難時代を迎えた。黙仙が住職を務めていた青谷町の中興寺でも、建物を小学校に使用する計画があったが、寺は仏教徒の修行のため大切だと唱え、拒絶し通した。

明治二十五年（一八九二）、静岡県県袋井市の可睡齋かすいさいの住職に迎えられる。この寺は徳川家康が建立し九十もの寺を支配していたが、これも廃仏政策により荒廃していた。直ちに可睡齋保存会をつくって、復興事業を始め、積極的に募金活動を進めた。

黙仙の人徳と経営の才能が発揮され、寺はみごとに復興した。

海外にも活躍の場を広げ、タイ国王の即位式やサンフランシスコで開催された世界仏教徒大会などに日本仏教界の代表として参加、アメリカ大統領とも会見した。

大正九年（一九二〇）、七十四歳で死去。

前田寛治まえたかんじ

前田寛治は、近代日本の画壇に新しい風を吹きこんだ画家といわれている。

明治二十九年（一八九六）、東伯郡北条村（現在の東伯郡北条町）の農家に生まれた。大正二年、図画教諭として倉吉中学校（現在の県立倉吉高等学校）に着任した中井金三に影響され絵画を学んだ。

大正十年（一九二二）、東京美術学校（現在の東京芸術大学）を卒業、帝展と二科展に入選し画壇にデビューした。翌年、パリに留学し、ルブル美術館などで古典の名作に触れながらセザンヌやクールベに学んでいる。

二年半後、帰国した寛治は第六回

帝展に『J・C嬢の像』を発表し特選となった。続いて『横臥裸婦』も特選となった。

大正十五年（一九二六）、パリ時代の画友、小島善太郎や佐伯祐三らと、「一九三〇年協会」を設立し、『棟梁の家族』などを発表しながら理論的リーダーとして活躍した。

昭和五年（一九三〇）、将来を期待されながら、三十三歳で亡くなった。



大栄町

お台場公園

東伯郡大栄町由良
J R 由良駅より車で三分

由良川が日本海に注ぐ河口とクロマツの海岸林に囲まれた風光明媚な場所にあつて、史跡探訪からキャンピング、マリンスポーツまで各種の楽しみ方のできるユニークな公園である。国道九号沿いの道の駅「大栄」が公園への入口である。

鳥取藩が幕末の文久三年（一八六三）に築造した砲台跡「由良台場」が、昭和六十三年（一九八八）に国の史跡に指定された。東西一二五メートル、南北八三メートルの敷地の周囲四〇〇メートルに土塁をめぐらし、八門の大砲を据え、常備の兵二十人さらに支援の農兵二百五十人を配置したと伝えられる。当時としても堂々たる砲台だった。大砲は、大栄町六尾に築かれたオランダ方式の反射炉（六尾反射炉）で鑄造された。町役場の近くに鑄造場の跡がみられる。

現在、公園には砲身三メートル、口径三五センチ、重量三トンという

当時最大級の大砲のレプリカ（銅製）が展示されている。また、公園に隣接して、反射炉をデザインした「歴史化学習館」があり、反射炉の模型がみられる。

平成三年（一九九一）には、その史跡の東側に九・七ヘクタールの広さの敷地に、スポーツやキャンプができる公園がオープンしている。陸上トラック、ローラースケート場、ゲートボール場、テニスコートなどの町民が親しめる施設があり、さらに海岸林の中にはテント百棟を張ることのできるキャンプ場がある。海浜キャンプが楽しめる場所として人氣が高い。さらに、公園に接した由



良川には、レジャー船二百隻を係留できる「マリーナ大栄」があり、日本海と直結したマリンスポーツの基地として活用されている。

イベントも多数行われ、七月には大栄町特産のながいもとすいかにちなんだ「すいか・ながいも健康馬拉ソン大会」、八月には花火の打ち上がる「お台場まつり」が開催される。

道の駅「大栄」

東伯郡大栄町由良宿
J R 由良駅より車で二〇分

国道九号沿い、由良川が日本海に注ぐ河口近くに位置する。海に面した海岸林を前に、周囲に砂丘農地が広がり、その向こうには大山を望む。施設の一部は平成四年（一九九二）にはオープンし、翌年四月の第一回目の登録で指定された古い道の駅である。

大栄町特産の「大栄すいか」や「砂丘ながいも」をはじめ地元野菜や加工品が豊富な「お台場市場」は、県内のファーマーズマーケットの先駆けとして有名である。レストランやバーベキューハウスもある。

西には史跡として整備されている幕末の鳥取藩の砲台「由良台場」跡があり、隣にはスポーツ公園のお台

場公園がある。

高尾八幡宮

東伯郡大栄町西高尾
J R 由良駅より車で二〇分

八幡宮は、元慶八年（八八四）に山城国石清水八幡宮（現京都府綴喜郡八幡町）から勧請したと伝えられる。同八幡宮の伯耆四別宮の一つ、種別宮とされる。誉田別尊ほか八神が祀られ、武運の神として武將に崇拜された。

戦国期、兵火で焼失、衰退したが、尼子氏により再建され、社領七十五石を寄進された。尼子氏滅亡により社領を失うが、藩政期は藩主・池田氏の祈願所となった。寛延元年（一七四八）、落雷により社殿を焼失したが、氏子の寄進により再興されている。

明治五年（一八七二）に、高尾神社と改称されたが、同十二年（一八七九）に、八幡宮に戻された。

大正六年（一九一七）ごろ、境内から平安中期と思われる経筒が出土した。

観音寺

東伯郡大栄町東高尾
J R 由良駅より車で約二十五分

元は近江堂ともいった。山号を円

通山といい、天台宗に属し、本尊は千手観音である。

この寺が所蔵する『観音堂略縁起』（万延元年・一八六〇）によると、行基が開いた寺と伝えられ、鎌倉初期に倉吉の大日寺や長谷寺とともに佐々木高綱によって再建されたという。

天保六年（一八三五）の再建の際には、籠堂なども建て増しされた。しかし、藩に無許可だったことからとがめを受け、同十四年（一八四三）には観音堂のみを残して全て破壊されたといわれる。

所蔵する平安後期の作と思われる古仏約五十体は、元は大日寺にあったもので、大永四年（一五二四）の五月崩れの戦乱（伯耆国の守護山名氏が出雲の尼子氏に滅ぼされた戦）のときにこの寺に移されたと伝えられている。うち木造千手観音立像と木造十一面観音立像は国の重要文化財に指定されている。

史跡 六尾反射炉跡

東伯郡大栄町六尾
J R 由良駅より徒歩
十五分

六尾集落の北部、由良川左岸段丘上に位置する、若一王子権現（現在は、西園の建速神社）の跡地五〇ア

ール余の地に製鉄の反射炉が建設された。安政四年（一八五七）四月に着工され、同年九月に反射炉二基が完成、総長六丈五尺で、一基あたりの一回の銑鉄生産量は四〇〇貫であった。

六尾反射炉は、鳥取藩が銑砲鑄造のために建設した洋式反射炉で、瀬戸村の武信潤太郎が反射籠御用懸としてこれにあたった。

砲身穿孔のための水車（錐入場）の動力として、由良川の利用が試みられたが、緩流のために失敗、変わりに加勢蛇川上流の矢下村（現東伯町）から「岩坪」の地を経て「六尾」にいたる長さ二里半、幅一間ほどの用水路が一年半の歳月をかけて文久三年に完成した。

同年二月、境湊（現境港）経由で大坂表に五寸砲筒五挺、実弾七〇〇空丸三〇〇が輸送されている。このほか、岡山藩、浜田藩からの注文を受けていた。

由良だんじり

東伯郡大栄町由良

高江神社の例祭日である十月二十四日に行われる御幸行列では、青年が神輿のように担いだ、だんじりが



巡行する。だんじりとは、関西地方の祭礼で用いられる飾りつけられた屋台のことで、通常、車輪が付き曳くものであるが、由良では担がれる。だんじりは、高さ三メートル、重さ四百キログラムに及ぶ。太鼓叩きをする四人と踊り手二人の子どもが乗り込んだだんじりを、二十人の青年が担ぐ。

だんじりは氏子の各家の前で下ろされる。そして、だんじりの担ぎ棒に板を敷いて作られた舞台の上では、扇と弊を手にした子どもが清めの踊りを舞う。だんじりを迎えた家では、酒と肴を用意してもてなす。

だんじり歌には、江戸時代、鳥取

藩の米倉があった由良から米が積み出される様子が歌われている。沖で待つ大型船に米を運ぶ地元の小船の航海安全を祈願し、その願開きとして奉納されたのが高江神社の祭礼であり、だんじりの巡行であったことがわかる。

東伯町

史跡 斎尾廃寺跡

東伯郡東伯町機下
J R 浦安駅より車で七分

白鳳寺院跡で大山から派生するならかな丘陵上に立地する。ここから海岸線まで一キロ余りと近く、日本海を見渡すことができる。白鳳寺院の堂塔基壇が土に埋もれることなく遺存している稀有な遺跡として、昭和二十七年（一九五二）、山陰唯一の国の特別史跡に指定された。



も類例の少ない建物配置を示す。講堂は塔・金堂背後の中軸線上にはなく金堂寄りに配されている。これと同じ講堂の配置は、東伯耆地域内の大御堂廃寺と大原廃寺にも見られ、地域的まとまりを示している。塔・金堂とも基壇化粧は川原石積で、塔の規模は東西一六メートル、南北一五メートル、高さ一・二メートル、金堂は東西二二メートル、南北約一八メートル、高さ一・六メートルである。講堂には基壇が造られず平地式である。昭和六十二年（一九八七）からの調査で、寺域を区画する溝が見つかり東西約一六〇メートル、南北約二五〇メートルと地方寺院としては広大な寺域を持っていたことがわかった。

寺域内からは瓦・土器類の他、鳴尾・塑像片・埴仏など多数が出土している。軒丸瓦は五種類、軒平瓦は二種類あり、このうち創建時の軒丸瓦は、中房に八個の珠文を配した複弁八葉蓮華文で、奈良県の紀寺と同じ文様である。

また、軒平瓦には、法隆寺と同じ忍冬唐草文もみられる。塑像片は仏頭・白毫・口唇・手足先・納衣など断片的であるが、主尊と脇侍を思わ

せる大きさの違いも見られ、このうち小振りの仏頭は、熟練した仏師の手による秀作である。堂塔周辺は、整備されており自由に見学することができる。

史跡 八橋城跡

東伯郡東伯町八橋
J R 八橋駅よりすぐ

J R 山陰本線八橋駅と八橋小学校との間にある丘の上に位置し、大江城とも呼ばれる。行松左衛門尉正盛の家城と伝えられる。戦国時代中期、出雲の戦国大名・尼子氏は、部将吉田肥後守の舎弟・吉田左京亮を同城に配置した。

中世の頃、伯耆の荘園（久永御厨、八橋郡）から年貢として鉄などが京進されている。港としての八橋は物資の集散地でもあったから、伯耆の特産物を求めて北国船も進出していたと考えられる。

毛利勢力が伯耆に及ぶと部将・杉原盛重が同城を預かったといわれる。盛重は、尾高城に弥三郎元盛を置き、自らは当城で東伯耆羽衣石の南条氏と対抗していた。

天正九年（一五八一）、吉川元春は嫡子・元長を八橋城に派遣、南条氏が秀吉に応じたことから八橋城は

毛利方の最前線となった。秀吉・毛利和陸後は、当城は南条氏の持城となる。慶長五年（一六〇〇）、伯耆一國が中村氏の領地となると、一族の中村彦右衛門一栄が同城主となった。

史跡 狐塚古墳

東伯郡東伯町八橋
J R 八橋駅より徒歩二〇分

海岸線から約五〇〇メートルばかり入った丘陵頂部に位置する前方後円墳。全長六一・七メートル、後円部径三三メートルあり、その規模は東伯町内最大である。主軸はほぼ南北に延び、前方部を北側の日本海に向ける。墳丘東側のくびれ部には、土器を供献する場所である造り出し（墳丘から張り出す平坦面）が見られる。後円部の背後には幅五メートルの掘割がみられ、丘尾切断により墳丘が形成されていることがわかる。

昭和四十九年（一九七四）の調査で前方部と後円部とのくびれ部で小型の横穴式石室が発見された。石室は、長さ一・七メートル、幅〇・七メートル、高さ〇・八メートルの規模である。この横穴式石室の存在から古墳築造時期は、古墳時代後期と思われる。昭和四十九年に町の文化

財に指定された。

津田家墓地

東伯郡東伯町八橋
JR八橋駅より徒歩三分

(体玄寺内)

津田氏は尾張の人で、織田氏の一統であるが、織田氏の支庶も多かったことから、織田元信は津田に改姓したといわれる。その子・津田元定の時、古木城が炎上して系図記録・重書を失ったと伝えられる。津田元綱は、池田輝政に仕えて五千石、その子元房は三千石を付与された。父の死後、元房は合わせて八千石を領することになった。その子元匡は、寛永七年に家督を相続し、家禄は七千石、鉄砲五十挺を預かっていたといわれる。

寛永九年（一六三二）、池田光仲が鳥取藩主となると、津田将監元匡は八橋郡に所領を与えられ、八橋を預かった。伯耆街道と八橋往来との分岐点に位置し、宿場町であった八橋には津田氏の陣屋が置かれた。

八橋城跡の南方一五〇メートルの地に、津田家の菩提寺体玄寺があり、同寺の西側丘上に津田家の十一基の墓碑がある。鳥取藩に仕えた初代元匡と二代の墓碑は見えないが、三代から十二代までと、三代婦人の墓碑

である。附近には一畑公園があり、桜の名所になっている。

逢束踊り

東伯郡東伯町逢束

江戸時代、逢束は由良・赤碕間の宿場町であり、藩倉も存在した港町として栄え、人の出入りも多かった。様々な地方の踊りが混入してできあがったのが、現在の逢束盆踊りであるといわれている。

現在は八月十四日に、海に面したあじさい公園で踊られる。演目は「西郷音頭」、「伊勢音頭」、「志賀団七」、「大文字茶屋」、「丁半踊り」の五種類である。このうち「志賀団七」



は、薙刀を持った女と刀を持った男が仇討ちの場面を表現する演劇性の高い芸能である。

方見神社

東伯郡東伯町上伊勢
JR浦安駅より徒歩二〇分

天照大御神など十神を祀る。かつては、天照皇大神宮、上伊勢大神宮などと呼ばれた。

創社年代はわからないが、社伝によると広さ四町四方の境内を所有し、伊勢神宮を模して野の宮、齋王殿、着到殿などがあり、上官以下十数名の神官が奉仕していたといわれる。中世以降、兵火や火災で衰えたが、その都度、古くは国司の波多野氏や南条氏、中村氏が、近世では藩主・池田氏が四石余を寄進して興した。かつて、祭日に向けての奉仕に、ミケノオコラ（「御饌の御子等」）かといつて、氏子の中から十三歳未満の少女十二人を選び、お神酒を醸し、神饌を炊く作法が伝えられていた。また、これら神饌用の稲を植えるときには、御田植祭を行ったという。

祭日には、当社を内宮、下伊勢鎮座の和伊智三社大明神（現槻下神社）を外宮に見立て、両社より十二頭の獅子頭と神輿を出し、同町神楽

谷で落合いの神事を行った。例祭日は、かつては九月十九日であったが、現在は体育の日である。

神社の随神門には、鎌倉期の作といわれる木造隨身立像が二体ある。

倉坂神社

東伯郡東伯町倉坂
山陰本線浦安駅よりバス十五分

倉坂神社は、近世には国石大明神・若一王神といわれ、石凝姥命など六神を祭神とする。創社年代はわからない。

荒廃していたが、氏子の神社再建への強い熱意により、明治元年（一八六八）に本殿が再建された。これは石見国（現島根県）の宮大工・嘉助が精魂込めて建造したものである。総樺造りの本殿に飾られた数多くの彫刻は見事で、無名の大工の手による神社建築として、これだけ手の込んだものは多くはなく、赤碕町の神崎神社のそれに劣らないものといわれる。

なお、その彫刻の一つの馬には伝説がある。この馬は夜な夜な稲田に下りて稲苗を荒らすので、眼に釘を打たれ封じられたと語られている。明治五年（一八七二）に倉坂神社となった。

転法輪寺

東伯郡東伯町別宮
JR浦安駅よりバス三分

もと湯谷山大教院と称し、平安時代の初期に開かれ、山岳仏教の霊場として栄えたという。

天禄二年(九七一)、醍醐天皇の皇子と伝えられる空也上人が、諸国行脚の途中ここを訪れ、翌三年(九七二)九月にこの寺で亡くなっ

たと伝えられている。上人は、自分の死期が近いことを悟り、自身の姿を残し衆生を守りたいとの願いから、上人自ら修業姿と往生姿の肖像を刻んだ。寺には上人の黒衣の修業姿(高さ九〇センチ)と、白衣の往生姿(高さ八十七センチ)が本尊として祀られている。秘仏であり御開帳以外には拝観できない。この木像は、昭和三十五年(一九六〇)に県の重要文化財に指定されている。なお、空也上人の事蹟の絵巻物が寺宝として伝わっている。これは、長さ一〇メートル余におよぶ絵巻物の大作で、江戸初期に描かれたものらしい。土佐派の流れをくむ大和絵で、この地方一流の絵師の筆になるものと思われ、繊細にして豪華である。上人の一代記を五つの絵によって表

現し、一幅ごとにお家流の達筆で、上人の事蹟が描かれている。また、三百年前に、この地方の木地屋(ろくろ師)が寄進した格調高い法輪塔には、塔身の三段目の裏側に「空也四代伯州久米郡木地山万屋勝助内儀寄進承応三年二月二三日」と墨筆で書かれている。この地方の木地屋の研究には貴重な民俗資料であるとともに、全国的にまれにみる供養塔である。

寺の近くには、空也上人のものといわれる霊地がある。この墓地には、目通り周囲四・六メートル、高さ九メートルのイヌグスの巨木がある。この巨木はタブノキであり、樹幹は極めて大きく、その枝振りもよく樹勢も強い。県では昭和三十一年(一九五六)五月に天然記念物に指定した。

また、本堂の境内に自生する巨木で、古くから「空也イチョウ」と愛称されるイチョウの巨木がある。日通り周囲五・四メートル、高さ二十八メートル、根周り十一・三メートルあり、昭和三十一年五月に県の天然記念物に指定された。

伝説

昔、転法輪寺に飼い猫がいた。

この猫が和尚さんの寝た後に人間に化けて踊っていた。それを知った和尚さんは、「おまえは長い間、寺に居てくれたけれど、もう出ていってくれ」と言って、鯉節を食べさせて猫を追い出した。

何日か後、遠くの村で長者の葬式があつた。和尚が呼ばれていざ出棺というときに急に天気荒れ始めた。そして、その状態は、何日も続いた。これは、化け猫が仕組んだことだった。

猫は古い師に化けて長者の家の前を通りかかり、「これは転法輪寺の和尚さんでないとおさまらない」と言った。そこで、転法輪寺の和尚さんが呼ばれ、拝み始めると嵐は止み、無事葬式を行うことができた。

それ以来、転法輪寺は広く知られ檀家も増えて栄えたという。猫の恩返しだったことから、今も寺の入口にはその猫の彫刻が飾られている。

伯耆の大シイ

東伯郡東伯町宮場
JR浦安駅よりバス二分
宮場入口下車 徒歩二〇分

春日神社(祭神・天児屋根命)の参道にある鳥居の近くの急斜面に立つ大シイ。

南方の枝は参道を越えて枝を垂れ生々と茂る。根際の周囲は斜面に沿って五〇メートルある。幹囲一〇・七メートルあり、根元から一メートルの位置の幹囲は二〇・四メートルある。胸高周囲は約一〇メートルで、枝葉の茂った面積は六六〇平方メートルに及ぶ。スダジイの木では有数の大木である。

このスダジイは、「日本の巨樹名木一〇〇選」に選ばれている。また、昭和十二年(一九三七)四月、国の天然記念物に指定された。



古布庄の大スギ

東伯郡東伯町中津原
JR浦安駅よりバス約
三十五分、終点下車、
徒歩一〇分

大正神社（祭神素戔鳴尊ほか）の南に、一本のスギが高くそびえている。根回り一三メートル、胸高直径二・三メートル、樹高三〇メートル、樹勢は良く、スギの巨木として有数である。また、古来から神木として地元住民の崇敬を集めた。

昭和三十三年（一九五七）十二月、県の天然記念物に指定された。また三本杉集落付近は大山鳥越、地獄谷から発する加勢蛇川の上流に位置し、国立公園大山の裏道にあたる。原始風景をのこす渓谷も多い。

三本杉の盆踊り

東伯郡東伯町三本杉

毎年、盆の八月十四日と、集落の金比羅さん・秋葉さんの縁日（七月十六日）に踊られる。

江戸時代中頃から踊られていたといわれ、鳥取県中部で広く踊られる「みつばし踊り」の原型ではないかと考えられている。本来、神仏へ奉納するものだという古い盆踊りの要素を伝える事例として、昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財

に指定された。

一向平

JR浦安駅よりバス三〇分、徒歩九〇分

東伯町の南端、加勢蛇川上流の標高四五〇～五八〇メートルに広がる平原。加勢蛇川の右岸に沿って長さ約一・五キロ、幅八〇メートルほどの広さをもつ。大山の火山砕屑物に由来する砂礫層からなり、平坦面上には火山灰層をのせないことからごく新期の河岸段丘と考えられる。

現在、この平坦地では、酪農が営まれ、最上流部にはキャンプ場とその管理棟などがあり、中国自然歩道大休峠コースの起点となっている。

ここから上流の加勢蛇川は、大山の秘境の一つである地獄谷とよばれる峡谷となる。自然歩道をたどり地獄谷へ入ると、鮎返りの滝のすぐ上流に架かる高さ三〇メートル、長さ四五メートルの大山滝吊り橋を経て、約一・五キロで大山滝へ至る。大山滝吊り橋は二〇〇〇年に発生した鳥取県西部地震により一時通行不能となったが、現在は修復されている。一向平と大山滝の間は、距離も短く起伏の比較的小さい歩きやすい山道なので、休日などにはハイキング

客も多い。地獄谷は大山隠岐国立公園に含まれている。

大山滝

東伯郡東伯町野井倉
JR浦安駅下車よりバス二〇分、終
点下車、徒歩六〇分

大山に源を発し、東伯郡東伯町を流れる加勢蛇川の上流にある滝。加勢蛇川上流の地獄谷の水を集めて、落差約四三メートル（上段二八メートル、下段一五メートル）を二段の滝を通して豪快に落下する。最大幅四メートル。水量、落差とも大山随一で、滝をつくる地層（造瀑層）は、古期大山砕屑物の溝口凝灰角礫岩中にはさまれる溶岩である。かつては三段の滝であったが、昭和九年（一九三四）の室戸台風によって崩壊し二段になったといわれる。

一般に、大山周辺に形成される滝は、地形の傾斜の変わり目や、浸食に強い溶岩と柔らかい火砕岩が分布するところにできやすく、加勢蛇川上流には、大山滝の他にも大休滝など多くの滝が形成されている。大山隠岐国立公園内の奥座敷の雄大な滝として、訪れる人が多い。

鮎返りの滝

JR浦安駅よりバス三十五分、徒歩二〇分

東伯郡東伯町加勢蛇川上流の標高約五一〇メートルに位置し、地獄谷の吊り橋の真下にある。落差は上段四メートル、下段四メートル。最大幅約三メートルの二段滝である。地獄谷入口にできた平坦な段丘面の一向平野営場から約八〇〇メートルの距離にある。

赤碕町

智積寺

東伯郡赤碕町竹内
J R赤碕駅よりバス二〇分 竹内停
留所下車、徒歩三分

智積寺は、山号を船上山といい、船上寺、智積院、法蔵院などとも称され、かつては船上山山頂にあった。天台宗に属し、大山寺の末寺であつたらしいが、現在は大雲院（鳥取市）の末寺である。本尊は地藏菩薩である。『船上山并寺内分限記』によると、寺が開かれたのは、元明天皇の頃（七〇七〜一四）という。また、船上山にはこの寺をはじめ十数院あつたといわれているが、戦国乱世の兵火によつて焼失し、その度に再興がくり返され、文禄年間（一五九二〜九五）には、争乱のために寺領がなくなつたとある。これは、豊臣秀吉が寺領を取り上げたためで（『船上山根元記』）、以後、山上の各院は荒廃していった。その中の一院、大乗院は山を下り、竹内村に草庵を構え、各院に關わる寺務をとつていた。大乗院から法蔵院へ寺務が引継がれ、大正八年（一九一九）、法蔵院は名前を以前の船上山智積寺に戻した。

明治はじめに出された神仏分離令によつて山上からおろされた古鐘には、「備前福岡庄 貞和三年（一三四七）…」という銘がある。これは、県の文化財に指定されている。また、本尊など三仏は享禄年間（一五二八〜一五三二）の作といわれる。

神崎神社

東伯郡赤碕町赤碕
J R赤碕駅よりバス十五分、徒歩
十五分

荒神さんと呼ばれ、牛馬の守護神として古くから有名である。現存する棟札によると、江戸時代、とくに八代將軍・徳川吉宗以後、盛んに尊崇され、鳥取藩主池田氏も代々尊敬している。社殿の本殿とその彫刻および向拝裏の滝の彫刻などが、昭和二十七年（一九五二）九月に県の保護文化財に指定された。

本殿は、鳥取藩のお抱え大工・小倉園三郎が、嘉永九年（一八五三）に建築し彫刻も施した。社殿は小さいが、地上に壇を造つて礎石を置き、その上に腰組という手のこんだ組物を組上げて、その上に社殿を造るといふ、この地方では珍しい方法が用いられている。屋根下から縁下にかけて、彫刻が施され、建築というより工芸品というのがふさわしい。本



殿向拝に唐破風、軒下には菊、竜、葡萄、りす、左側には素盞鳴命の大蛇退治、本殿正面屋上部には菊蓮、四隅の屋根下には鳳凰像、左側屋根下には扇と軍配・鶴、そして脇障子には恵比須、大黒、狸々、緑下には牛馬、波と兎、獅子、波と亀、そのほか木鼻に至るまで所狭しと彫刻してある。

拝殿向拝裏の竜は、本殿の制作者の孫である小倉平次郎が、明治十二年（一八七九）に完成したものである。縦四メートル四〇センチ、横六メートル三〇センチの天井の一面に、うねつた竜が彫られている。豪放な構図と雄大な刀法は天井全面

をよく生かしている。また、正面梁間の竜宮城や拝殿屋外の神功皇后と武内宿彌の像も、細かい刀を使い巧みに彫られている。

菊港

東伯郡赤碕町赤碕
J R赤碕駅よりバス十五分、赤碕公民館
館前下車すぐ

承応年間（一六五二〜五五）に藩倉と船番所が置かれ港として整備され、鳥取藩十湊の一つとなる。水深が浅いため、明治以降はこの港の東にある亀崎港（赤碕港）が使われるようになるが、江戸時代、藩倉の米はここから小船によつて沖に停泊する千石船へ積み出しされ、大坂中ノ島の鳥取藩大坂御蔵屋に回送されて



いた。

菊港は東西二つの波止（防波堤）からなる。『鳥取県郷土史』には古老の言として、東の波止は享保・元文（一七一六〜四一）頃に二二〇間、続いて西の波止が一八〇間の規模で築造されたと記されている。

また、『赤碕町郷土史』では、文政年間（一八一八〜一八三〇）頃に西の波止が改築されたと推察されている。一方、西堤基部の案内板には寛政年間（一七八九〜一八〇一）に築かれたとある。現在、菊港を描く古絵図は赤碕浦湊絵図（弘化二年＝一八四五、県立博物館蔵）と赤碕宿の古絵図（江戸後期、河本氏所蔵）の二枚が確認されている。特に後者は、波止改築前後の様相を示す貴重な史料である。この絵図の制作年は不明だが、『赤碕町郷土史』のいう文政頃と考えられる。

波止は人頭大の玉石が積み上げて造られ、西堤は東堤に比べてやや小振りである。東堤は長さ一五〇メートル、幅一三・八メートル、高さ二・三メートル、西堤が長さ九〇メートル、幅五・三メートル、高さ三・四メートルである。菊港は、玉石積みみの波止をよく残しており、わ

が国の江戸時代後期頃の築港の状況を知ることのできる港遺構として貴重である。

現在、西堤は途中で途切れ、それより先はテトラポットで補強されている。東堤の先端部に小さな灯台が設けてあり、また平成元年には、流政之作の石造彫刻「波しぐれ三度笠」（平成七年度鳥取県景観大賞受賞）が設置された。

赤碕塔

東伯郡赤碕町赤碕
J R 赤碕駅下車より徒歩一〇分

海岸に位置する花見潟墓地に全国的に類例の少い石造美術品赤碕塔がある。

宝篋印塔と宝塔とを混合した特異な型式のもので、石造美術として手のこんだものである。代表的な花見潟の四つの西塔は、鎌倉時代に造られたものと考えられ、基壇から宝珠までの高さが三・二五メートルあり、優美なものである。

昭和三十一年（一九五六）に県の保護文化財に指定された。

道の駅

物産

「ポート赤碕」

東伯郡赤碕町別所
J R 赤碕駅よりバス
十五分、ポート赤碕
下車

国道九号沿い、赤碕港を見下ろす

高台に位置する。赤碕漁港から水揚げされる鮮魚の販売で有名な道の駅である。眺望もすばらしく、情報コーナーのある円形の展望室からみる日本海は、その広さを実感することができる。また、漁火の夜景も見逃せない。

平成五年（一九九三）十一月に登録を受け、翌年八月に正式オープンした。駐車スペースは五十二台、大型車が楽々入れる設計となっている。鮮魚直売センターのほか、レストラン、さらにコンビニエンスストアがある。

なかでも鮮魚直売センターは赤碕漁業協同組合の直営で、新鮮なハマチ、ヒラメ、ウニ、サザエやワカメなどを販売している。道の駅全体の販売額も全国有数の規模になっている。

海が見える場所に、野外遊具を備えた「ふれあい広場」もあり、小さな子供も楽しめる。

また、近年、江戸時代に日本海で難破した韓国の漁船を鳥取藩と地元住民が手厚く保護したということが資料からわかった。その交流を後世へ伝えるため交流記念碑が設置されている。

大山や船上山のへの往来の折には是非立ち寄りたいたい道の駅である。

笠取塚古墳

東伯郡赤碕町別所
J R 赤碕駅よりバス約一〇分
赤碕東口下車、徒歩五分

古墳時代前期の前方後方墳。赤碕港を見下ろす丘陵先端部に立地する九基からなる別所古墳群のうちの一つ。全長五三メートル、後方部辺三〇メートル、高さ五メートルある。後方部中央に盗掘穴があり、副葬品は伝わっていない。また、埋葬施設の構造についても不明である。埴輪は認められないが、前方部埴裾には葺石らしき石が散在している。

前方後方墳は、出雲地方に多く分布し、しかも古墳時代後期まで造り続けられているが、鳥取県内では数少ない。本古墳は、県下で最初に確認された前方後方墳として知られる。国道九号沿いに古墳が位置することから、後方部墳丘上に交通安全祈念碑が建てられている。本古墳の東側には、同じ古墳群の別所二号墳がある。全長三〇メートルの前方後円墳である。

以西踊り

東伯郡赤碕町以西ほか

東伯郡赤碕町旧以西村及び近接の中山町旧逢坂村でみられる盆踊り。この踊りの特徴は、櫓太鼓を中心として輪になり、浴衣に編み笠・頬被りという出で立ちの踊り手が、身体全体で「しな」をつくるように踊る点にある。

松江中学に赴任する道中、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が見た（『知られぬ日本の面影』記載）中山町の盆踊りはこの踊りだとされている。なお、同町下市の妙元寺には小泉凡氏（ハーンの曾孫にあたる）揮毫の記念碑が立っている。



史跡 出上岩屋古墳

東伯郡赤碕町出上
J R 赤碕駅よりバス
五分、出上下車、徒
歩五分

古墳時代後期の古墳。墳丘は失われて、石室が露出している。石室は埋葬空間である玄室と前室とからなる複室構造で、玄室は長さ約三・六メートル、幅二メートル、前室は長さ一・六メートル、幅二メートルあり、石室全体は長方形である。奥壁の左右には、ノミ痕跡も鮮やかな切り石加工の側石が立てかけられている。玄門は、一枚石の中央を長方形に割り貫いて造られている。床面には、奥壁から一メートルの所に仕切石がある。前室の左右には、柱状の石を立てて入り口とし、扉石をはめ込む段状の掘り込みがある。

出土品は、玄室内で金環が一個発見されているだけで、副葬品は不明である。

また、切石造りの石室で玄門が一枚石を割り貫いて造られている石室は、淀江町の岩屋古墳（国史跡）をはじめ鳥取県西部に偏在している。本古墳はその東限に位置する。平成三年（一九九一）、県の史跡に指定されている。

河本家住宅

東伯郡赤碕町籠津
J R 赤碕駅よりバス一〇分、籠
津下車すく

河本家は、古くから大庄屋を勤めた家柄である。表門を入ると広い前庭があり、主屋は役所を兼ねて土間も広い。

主屋は四代目の普請と伝えられ、十八世紀中頃の建築と思われる。現在の建物は裏側に二間半ほど庇を付けて拡張したり、上手も角屋を延ばして客間を増設したりするなど改造が著しいが、もとは広間型五間取の建物と考えられる。

土間境の間仕切通りでは、大黒柱が棟通りから半間後により、表側の入側柱が側柱から一間のところ立ち、裏側では「へや」の上手の裏側よりに入側列の柱が見られるだけで、柱の位置が不規則になっている。

小屋梁の長さが四間半も大きな梁間の架構なのに入側列に柱の見られないのは、入側柱が必要なくなつたからで、小屋組架構の技術的な進歩を示すものである。

籠津のハマヒサカキ群落

東伯郡赤碕町籠津
J R 赤碕駅よりバス一〇
分、籠津下車すく

ハマヒサカキは、ツバキ科の樹高

一・五メートル内外の常緑低木で、本州の千葉県以西から沖縄、朝鮮半島南部、台湾にまで自生する。暖地性で早春に花をつける雌雄別株の海岸植物である。

籠津海岸は、大山の裾野が大きく日本海に突出し、そこには顕著な風衝形を示す様々な植物群落が見られる。その中にハマヒサカキ群落が存在する。対馬海流によって北上したとみられるハマヒサカキは、島根半島では比較的多く、その自生が確認されるが、籠津に見られる自生は日本海沿岸の北限群落として昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

本種は仏花に用いるヒサカキに似ているが、葉がより革質で光沢が強く、密に互生する点で見分けられる。

智光寺の樹叢

東伯郡赤碕町
J R 赤碕駅よりバス八分
赤碕中下車、徒歩五分

赤碕町内を国道九号に沿って走ると、車窓から日本海岸に向けてエノキの高木とともに藪状にマテバシイが密集する智光寺の樹叢が見えてくる。

マテバシイは、ブナ科の暖地性常緑広葉樹であり、主に関東以西、四国、九州の太平洋沿岸を中心に分布

する。

智光寺境内のマテバシイは、島根県日御崎付近とともに自生の北限とされ、平成元年（一九八九）四月に県の天然記念物に指定された。

樹高約二〇メートルに達する数本の成木のほか、多数の幼樹、稚樹が認められ群落として安定している。これは、この付近の海岸が日本海にやや突出し、対馬海流の影響で冬季も比較的暖かい地域であることによるものと考えられ、植物分布上からみて貴重な存在である。

天皇水

東伯郡赤碕町大熊
J R赤碕駅よりバス十二分、高岡
下車、徒歩五分

後醍醐天皇伝説の一つ。船上山に向かう後醍醐天皇が、当地にさしかかったとき、急に喉の渇きを訴えられた。従者が困っていると、天皇は近くの岩を指さし動かすようにと命じた。従者が大熊村一番の力持ちに岩を動かさせたところ、清水が湧き出してきた。喉を潤した天皇は悦んで、力持ちの男に「強力」と名乗るようになった。

現在、赤碕町に多くある高力姓はこの強力が変化した名字だと言われている。

名所 船上山

東伯郡赤碕町山川
J R赤碕駅下車バス三〇分
船上山少年自然の家下車、
徒歩三〇分

東伯郡赤碕町南西部にある標高六一五メートルの山。大火山地域のうち、東側の主要部を構成する。矢筈ヶ山（標高一、三五八・六メートル）から北方に甲ヶ山（一、三三八メートル）、勝田ヶ山（一、二一〇メートル）を経て延びる山脈の北東端に位置する。

山容は頂部が平坦な溶岩台地状の地形をなす。山腹斜面のうち下部の山麓部は緩やかであるが、上部は柱状節理の発達した溶岩の急崖となり、東斜面の上部は垂直に近い絶壁となり、「屏風岩」と呼ばれている。この絶壁は一〇〇メートル以上もあり、岩壁登はんの格好の練習場となっている。

下部の緩斜面一帯は、浸食で崩壊した碎屑物が堆積した地形で、茶園原と呼ばれる草原となっている。山岳仏教が盛んだった頃、船上山の寺坊の僧侶たちがこのあたりで茶の湯に使うお茶を栽培していたことになんて名付けられた。ここでは毎年春に野焼きが行われ、桜の名所ともなっている。

矢筈ヶ山から北方に甲ヶ山、勝田ヶ山、船上山にかけての尾根は、下層から船上山溶岩、甲ヶ山溶岩、矢筈ヶ山溶岩と呼ばれる少なくとも三枚の厚い溶岩流が積み重なってできている。これらの溶岩は古期の大火山活動によって流出し、尾根状になって残ったが、長い間の浸食により、周囲の高台が削られて、硬い部分を取り残されたものである。また、烏ヶ山南方の城山溶岩がつくる尾根、南西録の笛吹山から江府町吉原にいたる吉原溶岩の尾根もこれと同様な溶岩流である。

船上山の東側の急崖には千丈滝がある。この滝は勝田川支流にある落差の大きい滝で、東にある雄滝、西にある雌滝の二つの滝からなる。雄滝は船上山の溶岩台地の上を流れ、標高六二〇メートルから五一〇メートルにかけて発達し、落差は約一九メートル、最大幅は五メートルから五五〇メートルの付近に発達し、落差は約九〇メートル、最大幅は五メートル。どちらも板状節理の発達した両輝石石英安山岩の溶岩とその下の火砕流とを浸食して形成された滝である。

鱒返しの滝も勝田川支流の船上山溶岩にかかる滝で、落差六六メートル。上段、中段、下段に分かれている多段滝で、それぞれ四七メートル、十二メートル、七メートルある。

船上山は名和長年が後醍醐天皇を奉じて、北条氏の兵を破った古戦場である。一三三三年二月、天皇は隠岐島を脱出して伯耆に上陸され、以後五月に船上山を出発し、京都に帰還されるまでの八十余日を行宮として過ごした。この行宮跡は、国の史跡に指定されている。山上には、船上神社、行宮碑があり、麓には県立船上山少年自然の家がある。

船上神社

東伯郡赤碕町山川
J R赤碕駅よりバス三〇分、徒歩
九〇分

祭神は伊左那美命・速玉乃男命・事解男命の三神で、昔から船上山三所権現といい寺僧が奉仕した。

明治十一年（一八七八）に両殿に安置してあった仏体および仏具を赤碕町竹内の法蔵院（智積寺）に移し、船上神社と改称した。社前に碑があるが二メートル一〇センチ、幅九〇センチ余りで、豊後（大分県）の儒学者広瀬旭窓の撰文と画が刻まれ、「伯耆国八橋郡船上山碑」とある。

安政四年（一八五七）に、逢坂の橋井氏が建てたものである。

県立船上山

けんりつせんじょうざん

東伯郡赤碓町山川

J R 赤碓駅からバス三〇

少年自然の家

しょうねんしぜんいえ
分、船上山少年自然の家下車すぐ

大山隠岐国立公園内にある船上山は、山岳仏教が華やかな頃は霊場として栄え、また後醍醐天皇が隠岐を脱出して潜行した場所としても知られる。

県立船上山少年自然は、雄大な自然と歴史にふれながら、青少年の心身の健やかな成長のため、昭和五十二年（一九七七）七月に船上山の中腹に開設された。定員二百人の宿泊室のほか、体育館や研修室、レクリエーションホールなどを備えている。

休館日 月曜日及び年末年始、祝日
(土・日曜日は除く)

問合せ先 ☎ 0858・55・7111

塩谷定好

しおたにていしこう

塩谷定好は終生ふるさとを離れることなく、洗練された技巧的作品で芸術写真を開拓した。

明治三十二年（一八九九）、現在の東伯郡赤碓町の回船問屋に生まれ

た。小学生のころからカメラを持って身近な海浜風景などを写していたという。

大正八年（一九一九）、赤碓町にアマチュア写真クラブ「ベストクラブ」を創設し、活動の拠点とした。

「自然のこころをわたしのこころとして写す」として、豊かな郷土の自然や温かい人物像をとらえ、軟調の写真で表現した。また、印画紙を曲げたり、ゆがめたりしたデフォルメや、油絵の具を使って明暗をコントロールするなど、その作風は当時、多くの写真家に鮮烈な衝撃を与えた。

大正十二年、国際サロンに『砂丘』を出品し、初入選したのをはじめ数々の写真展に入賞した。西独ケルン美術館のフォトキナ写真荣誉賞受賞、日本写真協会功労賞など国内外で高い評価を得ている。

昭和六十三年（一九八八）、八十九歳で亡くなった。